
真・都市伝説の不死身さん

まちがい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・都市伝説の不死身さん

【Nコード】

N3450W

【作者名】

まちがい

【あらすじ】

都市伝説が牙をむく。原因は未知の物質か人の性か。巻き込まれる不死身のお話。

下男（前書き）

この作品は文芸社に送った作品です。ここで書いた最初の作品にテコ入れしたのですが・・・

結果は自費出版になるが本にしましうとのこと。・・・自費って（；^ω^）

下男

月の光が雲に遮られ、街灯の灯り無しには歩けないほどの暗闇。道路を挟んだ向こう側の堤防が高い壁のように感じられる。昼間の残滓のむわつとした空気がアスファルトから昇っている。

一息吸えば、熱せられた空気が肺に入り、疲労を増加させる。

近くに川がないのでカエルの鳴き声は聞こえないが、聞こえてくる波の音や虫の音が十分に夏を感じさせる。逆にいえばその音が聞こえるくらいの静寂が夜を覆っている。

ただ、新田佐代子^{にうたさよこ}にとっては単に蒸し暑い夜にしか感じられなかった。

佐代子はクタクタのスーツを纏い、肩で切りそろえた茶色の髪を、苛立った様子でくしゃくしゃにしながら夜の街を歩く。

佐代子が歩いてきた道沿いには、3階建てのビルの最上階に線路が刺さっている様に見える建物がある。駅だ。

真ん中に駅名が記入されているだけの簡単な外装。駅を除けば中にはコンビニと切符売り場、駅員が出入りする従業員用の施設のみお土産屋やスーパ―なども入っていない。まさに電車に乗るためだけの施設だ。このような造りになったのには理由がある。

佐代子が暮らしているここはいわゆるベッドタウンと呼ばれる所。しかし、一般のベッドタウンとは違うところがある。それは規模だ。佐代子が住んでいるのは本州から少し離れた埋立地。

様々な技術の進歩により娯楽の種類は増えていった。ゲームセンターやボーリング、二十四時間のマンガ喫茶などがどんどん建設された。またそれを企画する会社もおのずと増えていくため、実際の生活空間は圧迫される形になった。

国も経済の成長にこの第三種産業が発展することを願っているため、日本の殆どは会社と娯楽施設によって土地を埋めている。

そこで政府は日本の面積の拡大に乗り出した。諸外国との交渉により、一定の地域にのみ日本の拡大を許した。

そして海を埋め立て、寝て起きるためだけの島が出来たのである。佐代子が住んでいる島は本島と橋で繋がっている。距離は五キロ程。上の道路は車やバイクが移動し、その下の線路を電車が走る。更にその下にはチューブのお化けのように見えるもので囲まれた動く歩道があり、歩行や自転車でも本島に渡ることができる。どちらも無料なので歩道を使う人は少ない。

佐代子はいさつきその電車の終電で帰ってきたのだ。

自分が必死になって働いている間に世の中はもっぱら夏休みの話題でいっぱいである。

夏休みにもなると、本島は毎日お祭り騒ぎになる。そうなると必然的に電車も混む。そして佐代子が勤めている会社も若者をターゲットにしたゲームセンターの運営を行なっているので仕事も増える。電車の混み具合も仕事の量も比例して膨れるというのだからたまらない。考えただけでも疲るので、佐代子は考えることを放棄し、ただグツタリと背中を曲げ、ポツポツと立っている街灯の灯りをくぐる。

周りに見えるのはベッドタウンと言われるだけのことがあると関心するほどのマンション群。それも階層が高いものばかりだ。

まだ出来て新しいこの島は住む人の目を楽しませるために色々と工夫をしている。

今佐代子が歩いている道は全てレンガ敷きになっている。水捌けも意外と良く、雨の日に水溜まりを見たことはない。

街路樹も変わっており、普通に木や草を植えているものから、熊やイルカの形をしたものも所々で見かける。逆に考えればここまでしないとこの島での生活はつまらないということだ。

ここに来たばかりの頃は夜中に変な街路樹を見て驚かされたことが何回もあったが、今となっては見飽きたものだ。

風もない深夜の道を歩く彼女は自分の髪を額の汗ごと手でかきあげる。連日の激務で疲れた体には持ちなれた手提げ鞆もズシツと重みを主張してくる。投げ捨てたくなる衝動を堪え、黙々と帰路を急ぐ。駅から歩いて十五分。ようやく彼女のマンションが見えてくる。

オルウェール美園。それが彼女のマンションだ。地上十一階。地下は駐車場になっている。全体的にクリーム色をした長方形のマンションだ。窓の明かりがポツポツと見えるが大体の住人はもう寝ている。彼女にとってはいつもの光景だ。

自宅マンションに入り、すぐ目の前にエレベーターが横並びに二台ある。向かって右側が上りで左が下りとなっている。エントランスと言うほど豪華な造りではないが天井には無駄に大きなシャンデリアが暖かな光を注いでいる。エレベーターに乗る前にまずは手紙などが来ていないかポストをチェックするもののだが、このマンション、ポストにひと工夫あり、部屋番号のポストに手紙などの配達物を入れると自動的に部屋のほうへ届けてくれる。まるで長い掃除機みたいだと彼女は思う。

彼女の部屋は最上階の十一階。右側のエレベーターのボタンを押し、降りてくるのを待つ。

今日は散々だった。夏休みに向けての最終調整中にトラブルが起き、その始末を自分に押し付けたあのズラ係長。おかげで終電ギリギリまで仕事が長引いてしまった。

（いつかそのズラを丸めた新聞紙で吹き飛ばしてやる）

と心で毒づく。

ポーンとエレベーターの到着音がシーンとした空間に響く。扉が開き、足を引きずるように乗り込んだ。疲労困憊の彼女にはもう足を上げることさえ疎ましくなっている。

上昇するエレベーター。その微かに感じる重力の重みと駆動音はなぜか心を不安にさせる。狭い空間はそれだけで逃げ場がない。部屋

の階に近づくに連れて安心して安眠するのだが、その分、別の世界に近づいている感じも受ける。そんなものあるはずもない妄想だと分かっているのだが、エレベーターという長時間いることのない特別な空間はそんな心の弱い部分を浮き彫りにさせる。ポーンと、お決まりの到着音が鳴った。

（別に閉所恐怖症じゃないんだけどね）

何故かホッと安心する自分に苦笑する。

扉が開き、少し急ぎ気味でエレベーターから降りる。

部屋は一階に六部屋ずつある。佐代子の部屋は廊下の突き当たり。角部屋である。そこからの景色はとても遠くまで望めるのだが、生憎深夜では各階の部屋の電気がほとんど消えているため、道路の街灯以外に光はない。ベッドタウンならではの景色である。廊下にもライトは付いているが、オレンジの光は廊下を朝とは別の顔に変える。

陽があるうちはなんともないのだが、夜に廊下を歩くと、別の世界に連れて行かれるのではないかと錯覚させられる。更に十一階という高さは空気も変化させる。今までの暑い空気からひんやりとした空気に変わり、場の雰囲気が一変する。もう波の音や虫の鳴き声も聞こえない。完全な静寂は佐代子の孤独感を一層強くする。

だが、たかが十五メートルの距離。どうということはないと自分に言い聞かせるように呟き、歩き出す。

コッ・・・コッ・・・コッ・・・

廊下に響くのは、自分の乾いたヒールの足音だけ。冷たい空気が体を舐めるように流れていくのを敏感になった肌が感じる。

コッ・・・コッ・・・コッ・・・

反響する靴音はまるで自分の後ろを誰かがピッタリと付いてきているように感じる。自分の心臓の音でさえ、まるで自分の音ではない様だ。

コッ・・・コッ・・・コッ・・・

後少しでドアに手が届く。安堵と焦りが最高に高まる。そうなるのもう辛抱できない。

急いでドアノブを掴みホツとするが、後ろを振り向く勇氣は出てこない。今も背中には誰かがくつつくぐらいの距離で立っているような想像が奔めく。急いで開けようと鍵を回すが

「・・・？あれ？」

鍵からは解錠した感覚がこない。鍵を閉め忘れてしまったのかと考えたが、毎朝念入りに確認をするようにしているので、そんなことはないはずだ。

不思議に思いながらも何かの勘違いと結論づけ、部屋に上がろうとドアを少し開けたとき、微かに部屋からなにか聞こえてくる。

ペタ・・・ペタ・・・

ドアの向こうからこつちに近づいてくる足音が聞こえてきた。それは裸足でフローリングの廊下を歩いている音。

ペタ・・・ペタ・・・

締めたはずの鍵が開いていて、そして誰もいないはずの部屋からの足音。

ペタ・・・ペタ・・・

その足音は段々と大きくなってきている。いつの間にか佐代子は、手に嫌な汗をかいていた。

空気がおかしい。今まで普通に感じていた空気がピンと張り詰め、息苦しい。

泥棒なのか、それとも自分が今まで想像してきた別の「ナニカ」なのか。しかし泥棒なのだとしたら急いで警察に電話しなければならぬ。「しかし」「けれども」が頭の中をグルグル周り、考えているようでも考えていない状態が続く。

ペタ・・・ペタ・・・

思考を放棄しても現状は何も変わらない。体は震え、少しの音でも気付かれる様な気がして、呼吸も浅くなっている。耳に聞こえてくるのは足音と自分の心臓の音だけ。もはや廊下のライトの明るさは感じない。真っ暗闇の中で自分とドアだけが存在している様だ。

ペタ・・・ペタ

「!!!!!!!!!!」

足音が止まった。つまり今、ドアを挟んで向かい合っているということだ。

呼吸がだんだん荒くなってくる。口だけの呼吸は肺に十分な酸素を送れていない。頭もクラクラしている。足は立っている感覚がない。体中が総毛立っている。痛いほどの静寂が気を狂わせる。目は瞬きもせず、ジッとドアを見つめたまま動けない。頭の中はすでに白紙。

・・・ボコン

扉が開き、部屋に空気が入ることと起きるドアの軋む音が木霊する。頭は何も考えていないのに、視覚の情報は鮮明に脳に焼き付く。ドアの隙間から覗くモノは・・・

「おかえりー。遅かったね？姉さん」

白のタンクトップに青のジーンパンを履いたラフな格好をしている、妹の美代子だった。

「・・・」

ゴツンと美代子の頭にゲンコツを落とす。

「いったーい！何するのよー」

「痛いじゃないわよ！来るなら来るって連絡入れなさい！驚くじゃないの・・・」

「ごめんなさいと謝る妹を見て、足音の正体が分かり、安堵の息を
はく。

「まあ外も暑いし疲れてるみたいだから、早くあがりなよ」

「あんたが言わないの」

妹に苦笑しながらも、促されるままに家に入ることにした。

下男（後書き）

まだまだ続きます。最初の不死身さんとは比べると結構変わっています。

暇つぶしにいかがでしょうか？

下男2（前書き）

続きです。

下男
2

佐代子の部屋は一般的なLDKタイプだ。玄関から短い廊下を歩きT字路を曲がった先の突き当たりに、洗濯機が置いてある。そこから向かって左がお風呂場、右がトイレになっている。曲がり角から洗濯機の前の籠に洗濯ものがうず高く積まれているのが見える。

(・・・まあ明日でいいか)

先延ばしにすることでとりあえずの安寧を得る。

通路の左側には小さい台所がある。とても綺麗に片付いて見えるが実のところ、全然使っていないだけ。食事はもっぱらインスタントだ。調理道具は手鍋と電子レンジだけ。あとは調味料のみ。

料理には何回か挑戦した。しかし残飯しかできない不思議。その難問に挫折した記憶は心の金庫に入れ、海に沈めた。

廊下を突き当りまで進むとリビング兼ベッドルームだ。

部屋に入るなり、涼しい空気が火照った体を冷やす。

部屋に入つて正面に大きな窓がある。十一階という高さもあつて、眺めは中々だ。いろんな形のマンションがところ狭しと建っているのが見える。見慣れたもので真新しさはなにも感じない光景だが、ここに自分と同じ境遇でがんばっている人がいると思うと少し、感慨深いものを感じる。

窓に向かって右側には二十七インチのテレビが置いてある。その横に並んで、大きな木製のタンス。

窓の向かい側には大きなベッドが置いてある。せめて寝るときは快適に！という志のもと、引っ越す際に奮発したダブルベッドだ。周りにはいろんな種類のぬいぐるみが置いてある。

部屋の真ん中には座布団代わりのピンクのクッションと黒い机がひとつ置いてある。汚れも目立たず座ったらちょうどいい高さで結

構気に入っている。机の上にはノートパソコンが一台だけ。窓を向いて左には小さな化粧台が置いてある。三面鏡の少し古いものだ。壁も白一色で全体的に見てベッド以外は年頃の女性の部屋とは思えないほどシンプルな内装になっている。

佐代子は手に持っているカバンをベッドに立て掛けるようにして置く。そして飛び込むようにしてベッドに寝転がり一息つく。

「はあ、疲れたあ」

妹のせいで怖い思いをしたが、家に帰ったことで緊張の糸が緩んだ。体に蓄積された疲労が思い出したかのように襲いかかってくる。

美代子はそんな姉を見て一言

「なんかおばさん臭いよ？姉さん」

余計なお世話だと佐代子は思う。

「誰のせいだと思ってるの。緊張しすぎて心臓が破裂するかと思ったじゃない」

あの時の恐怖を思い出すだけで言いようのない感覚に囚われる。実際、とても怖く心細かった。あんな体験は二度とごめんだと強く思う。

落ち着いたところで佐代子は美代子に疑問を投げかける。

「あなたどうして私の家にいるの？」

美代子が来るといふ連絡は受けていない。鍵は合鍵を実家に置いてあるので問題ないがここに来た理由が気になった。

「だって夏休みだもん。一度は姉さんの家に行ってみたかったんだよねー。姉さん実家に殆ど帰って来なかったから、顔も見なかったし?」

あどけない笑みで、美代子は答えた。

妹は地元の中学二年生。まだ子供っぽいところが残っているがなかなか美人だと佐代子は思っている。鼻肩目かもしれないが、実際のところ、交際の誘いは多くあったらしい。

姉とは対照的な黒のロングヘアはサラサラしていて、つい撫でてしまう。それをくすぐったそうにする妹を見て、今日の疲れは殆ど無くなった。

美代子はベッドの周りを見て

「なんかぬいぐるみ多いね? 姉さんってぬいぐるみ好きだった?」

と近くのワニのぬいぐるみを拾い上げながら言う。

「もうこれがないと眠れなくてね」

子供っぽいかなと聞くと、うつんと美代子は首を左右に振る。

この子は昔から姉の言うことに逆らうことはなかった。ケンカをしてもいつも美代子が先に折れてくれた。親に叱られた時は慰めてくれた。年は結構離れているのにまるで美代子のほうがお姉さんの様だ。いつかは美代子に頼られる姉になると、今まで努力してきたのだが、まだまだ修行が足りないらしい。

お互いの近況を話し合っていたさなか、グウーという音が鳴った。テレビも付けていなかったので部屋中に響いた。

「おねえちゃあん」

甘えた声で美代子がお腹をさすりながら言う。時刻は午前一時。美代子がいづから部屋に居たのかは知らないが普通は寝ている時間帯。外を見ると漆黒の闇が広がっている。どうやら向かいのマンションの住人全てが眠りについたみたいだ。お腹が空いて当然かと佐代子と思う。

考えてみたら自分も何も食べてない。久しぶりに会った可愛い妹の突然の訪問に興奮していて、食欲が頭から飛んでいたみたいだ。ベッドから体を起こした佐代子は、伸びをしてから立ち上がる。

「ふふっ、わかったわかった。何か食べようか。今日はカップラーメンしかないけど、明日は仕事が休みだから、何か美味しい物でも食べに行こっか」

やったーと美沙子は両手を上げて喜びを表す。そんなに喜んでもらえるところらも嬉しくなる。連日の疲れを吹き飛ばしてくれる美代子の存在は佐代子にとってかけがえのないものだだと改めて実感する。

美代子の動作に苦笑しながら佐代子はキッチンに向かって歩き出す。うちにある唯一の調理器具の鍋を取り出し水を入れ、一口コンロのスイッチを入れる。今は電気ですぐお湯が沸くものがあるらしいが佐代子の家にはない。むしろ鍋の方がお湯も沸かせるし、袋のラーメンも作れるのでこっちの方が便利だと考える。

お湯を沸かしている間に美代子は何をしているのかと思い、部屋を覗いて見ると、立ち上がって窓の方へと移動している。外が暗い為、窓は鏡のように部屋を映し出している。そのせいで外が見えないのか美代子は体を前後左右に動かしてなんとか外を見ようとしている。

そんな光景を見て微笑ましく思っているうちに鍋の水が沸いたようだ。コンロの下の子棚からいくつかのカップ麺を取り出す。ラーメン、うどん、ソバ等、美代子に好きなものを選んでもらおうと四つ

ほど持ち、部屋に戻る。

「美代子。どれにす・・・」

廊下が部屋へと変わる境目にかかったとき、

部屋の中の光景がまるでテレビから別の世界を覗いているかのように感じた。

窓に背中をあずけ、足を投げ出すように座っている美代子が赤く染まっていた。

下男2（後書き）

次から本番かな。

下男3（前書き）

ここまでが最初の事件。

下男3

壁、床、机、ベッドと、その殆どが赤く染色されている。動かない美代子の喉から今もなお、ドロリとした液体を撒き散らしている。ピクリとも動かない美代子は、頭を垂れていて顔が見えない。それが一番佐代子の心を揺さぶった。

佐代子は、まだ美代子が生きているかもしれないという、淡い期待を抱いていた。

実はこれが美代子の悪戯で、佐代子を驚かせようとしているのだ。この光景を見て、そんなことを思うのはオカシイのだが・・・

冗談はやめてよねと口を開きかけ、ふと気付く。

髪からも赤い雫がポタリ・ポタリと垂れている。雫ができる速さからみて、相当濡れている。

血で。

白いタンクトップは赤を鮮やかに写し、青のジーンパンは黒に近い色に変わっている。

何が起きているのかわからない。体が動かない。目。

これだけが忙しく動きまわる。しかし焦点が合わない。視界はぼやけ、そこから情報を得ることが困難だからこそ、頭が働かない。だから体に命令がいかない。

負のスパイラルに陥る。

何もできない中で、只々、赤を生産する妹がいる空間を凝視することしかできなかった。

時間が過ぎる。

どれだけ突っ立っていたのだろう。美代子の血が止まった時、金縛りが解けたかのように体が動いた。

なんとか引きずる形で足を動かしていく。体が拒否している。今の

美代子に近づく事を。無理矢理動かした足は肉を引きちぎるような痛みを発する。

手は未だにカップ麺を持ったまま、落とさないように慎重に持っている。もはやこれが楽しかった時間の名残なのだ。これを落としてしまったら、この状況を受け入れないといけない。カップ麺を持っている間はまだあの時間に戻れるような気がして。

心臓の音がやけに響く。今にも破裂しそうな痛みさえ感じる。足を引きずる音、カップ麺の擦れる音は全て佐代子に届かない。

美代子に近づくにつれ、息が荒くなっていく。口で呼吸をしているせいか、口の中は乾き、喉はカラカラだ。喉の肉が乾燥で張り付いて息ができず、ときどき咳がでる。それでも唾を飲み込むこともせず荒い呼吸を繰り返す。

部屋は冷房を入れているので暑くないはずなのに、汗は頬を伝い口に入ってきた。そこでようやく喉を潤すために唾を飲み込むことができた。

かなりの時間をかけて美代子の元にたどり着いた。約五、六歩の距離。しかし佐代子には百メートルほどの距離に感じた。

上から美代子を見るとまるで眠っているように見える。先程まで撫でていた頭。整った綺麗な髪。美代子のチャームポイントのひとつだったはず。

そこからさらに下。顔を見るためにしゃがむまでには覚悟が必要だった。別に身内が死ぬことは初めてではない。可愛がつくれた母の両親。佐代子がまだ小学生の時だったがとても悲しくて大泣きしていた記憶が呼び起こされる。両親に抱かれて慰めてもらった。しかし今は一人。さらに自分が一番可愛がつていた妹の死。それを受け止めきれなのか。想像しただけで心は軋みをあげる。

もしかしたらまだ生きているかもしれない。血は運良く首の肉が血管を圧迫して止血の役割をはたしたのではないか。と到底ありえないことを想像する。だが生きているかもしれないという考えがあるとないとでは行動力に大きな違いがでる。実際に佐代子はそこか

ら思い切って美代子の顔をのぞき込んだ。

顔がなかった。

「

」

手に持っていたカップ麺が落ちると同時に声にならない絶叫が発せられる。

目や鼻、口があるはずの顔面は何か鋭いもので何重にも抉られていた。目と耳があった場所は空洞と化している。肉が傷口からはみ出て、頬からは白い骨が見える。そこから血がまだ滴っている。

腰が砕けた。赤い海に座り込み、べちゃっと音が鳴った。床に広がっている血のヌルリとした感触に寒気が走るが、そんなことに構ってられない。

「！！うう・・・！！」

吐き気が込み上げ、とつさに口を両手で覆う。生涯、見ることはない光景を今、自分の家で、自分の妹で見せられている。

今すぐに目を閉じたい。しかし、自分の意思に反して目は美代子の体をしっかりと見ている。

血が勢い良く出ていた箇所の喉。喉の幅半分が切り取られている。木を倒すときに最初に行う切り方のような傷口。ここまでひどい傷を負っているのに、体だけは見たところ、傷一つついていない。しかし人を殺すには十分すぎる。

ひどすぎると佐代子と思う。さっきまで楽しく話していたこの子が、なんでこんな酷い死に方をしているのか。

一瞬にして世界が変わった。ピンと張り詰めた空気。視界に入るのは地獄。心は伽藍堂となり、朽ちるのをただ待つだけの体を必死になんて動かしている自分。

佐代子の世界は完全に破壊された。

だが、佐代子は動く。美代子を吊ってやらないといけない。

涙は不思議と出てこない。めまぐるしく変わる心が、泣くという感情を持つてくるのに時間がかかる。その間に出来ることをするべきだ。

部屋の入口の側には、固定電話が置いてある。そこに向かいながら、佐代子はすべきことを整理する。

「・・・まず救急車に連絡を入れて、そして警察に・・・！」

足が止まる。

今更気づいた。

美代子は確実に誰かに殺された。自殺や事故で、こんな傷ができるはずがない。なら、

まだこの家に、犯人がいる可能性がある。

小夜子は右手で口を覆い、愕然とする。

なぜ、今まで気付かなかったのか。妹の状況を見る限り、確実に相手は話を聞くタイプではない。ここにいたら二の舞だ。

部屋を出よう、と歩きだしたとき、足は妹の前で止まる。妹をここに置いていくのは心苦しい。しかし、今犯人がこの家にいる可能性は極めて高い。早々に離れなければ。

迷っている佐代子の耳に、音が聞こえた。

ズリ・・・ズリ・・・

妹の死体の反対。ベッドの方から、何かを引きずるような音が聞こえる。

ベッドの下には人がもぐり込めるだけの隙間がある。音の発信源

は多分そこだ。

落ち着き出した空気が再度緊張の糸を張り巡らす。

ズリ・・・ズリ・・・

それはとてもゆっくりとした動き。

その怠惰な動きは、佐代子の精神をグチャグチャにする。

ズリ・・・ズリ・・・

地震がきたのかと思うほどの震えが起こる。

（な・・・なに！？）

大きな物体が動く音。

聞こえる度に佐代子を襲う、

不安感。

孤独感。

部屋の光は付いている。光源は十分なはずなのに、目の前はとても薄暗い。今しがた起こっていることについての答えを、脳が求めてくる。

しかし後ろを振り向く勇気がでてこない。恐怖は、佐代子を感じがらめにする。

ズリ・・・ズリ・・・

だが、同時に怒りも込み上げてくる。

最愛の妹を、後ろにいる何かが殺したのは明らか。ならせめて、一矢報いてやりたい。

心はまだ、死んではいないらしい。佐代子は縫いつけられたよう

に動かない足を無理矢理床から剥がす。
勇気を出し、ベッドの方へと振り向く。

見るべきではなかった。

逃げるべきだった。

理解した時には、佐代子の首は胴体から離れていた。

下男3（後書き）

次から主人公の登場です。

下男4（前書き）

やっと主人公です。

下男 4

夏。空には薄雲が覆っているが、そんなことはお構いなしに、太陽は熱で地面を熱い鉄板へと変える。

周りの人々は涼を求めて、忙しなく行き交う。風は吹いてはいるが、暑さを無視できるほどのものではなく、逆に暑さを増長させる。

日本は廃藩置県制度を取りやめ、関東、四国、東北、と呼び方を変える「州置制度」へと移行した。

主な理由として、日本は、完全に娯楽だけを極める遊国となっている。もちろんターゲットは日本人だけではなく、国外のだれもが、やったことがない癒やしや娯楽を提供する、世界で初めての専門国家となった。こうなってくると県で分けると細かく、整理するのはとんでもない労力を使う。そこで管理しやすいように、八つに区分したのだ。

ここは中国州。つまり元中国地方だ。その、娯楽施設が建ち並ぶ中心街。周りは色とりどりの建物やラジコンのように動く独創的な看板。間を縫うようにしないと歩けないほどの人の群れ。

現在夏休み。学校という牢獄から一時期の釈放を許された元気な若者が、この人ごみの半数以上を占める。

ひしめき合うように建物が建っているが、実際はエアコンや換気扇設置のため、建物の間には人が入るくらいの隙間が空いている。そこでは、連日のように罵声や怒号、悲鳴があがる。

繁華街では、やはりお金がものをいう。そこでお金がほしいと思う若者たちは、路地裏にターゲットを引っ張り込み、恐喝が日常的に行われている。

もちろん、警察は路地裏をマークはしているが、建物の量が多いため、とても全ての路地を抑えることはできない。申し訳程度に監視カメラが置かれているくらいだ。

その中のひとつ。警察がいない路地。今まさに恐喝が行われていた。

「おら、金出しな。そうすれば殴らないでおいでやるぜ」

グヘへと笑う焼けた肌の青年。その他に高校生くらいの少年が三人。合計四人で一人の少年を壁に追い込み、半円の形で囲っている。襲われている少年は中学生ぐらいに見える。

中学生は渋々、財布を取り出しそれを日焼けの青年に取り上げられる。

「おう、結構稼いでるじゃないか。ありがたく使わせてもらうぜ」

中学生の財布には数十万のお金が入っていた。

何もこの子がお金持ちの家の坊っちゃんという訳ではなく、この子のような中学生は大勢いる。その理由は、

この国では義務教育はそのままなのだが、それを終えた後の高校から大学の学費は、高く設定されている。

その一番の理由は犯罪数。

今の日本は義務教育が終わっただけでも就職は容易にできるようになっている。娯楽施設は常に立ち続け、人手がほしい時期。どのような人材でも引く手数多なのだ。そのなかで高校や大学に行くのは、まだ社会に出て働きたいという人達の集まりであると、陰口をたたかれる。なら高校・大学を出ることに意味はあるのか。

実は自分の店を持つ条件が高校・大学を卒業すること。もちろん、高校より大学を卒業したほうが利点はある。開ける店の種類が違っただ。

例えば風俗関係は大学卒業の証明書がないと開けない。ゲームセンターは高校卒業で開けるがゲームショップは大学卒業生じゃないとダメだ。

このように卒業することに利点はあるのだ。

だが現実には高校・大学を卒業しても店を開かず、どこかの店に就

職するものがほとんど。

つまりは、まだ遊ぶために学校にいつているものが多いのだ。

この中学生がお金を持っていたのは、もう義務教育を終了し、働いていたからだ。

財布を取り上げられた中学生は涙を流した。

一生懸命に働いたお金が、どこの誰かもわからないヤンキーに全てもっていかれる屈辱と、向かっていこうとする勇気が出ない自分の情けなさ。

色々な思いが胸を締めつける。足は震え、腰は砕けそう。背中の壁のおかげでかろうじて、座り込んでしまうという、みつともない姿を見せないですんでいる。

（警察は何をやってんだ！こういうことが起きないように見廻っているんじゃないのか！）

とぶつけようのない苛立ちを、いない警察にぶつける。

誰か助けてくれないかと思う。

路地裏を近道として使う人は結構いる。表の道の作りが、蛇のようにクネクネしたものとなっており、真っ直ぐに進むには路地裏を通るのが一番早いのだ。

何人かはここを通ろうとしたが、彼ら四人の姿を見て、そそくさと引き返す。

（こいつらに捕まらなければ、今頃は友だちと楽しく遊んでいたのに！）

心の中でなら強気でいられる。しかしそんなことを考えたせいか

「ん？何睨んできてんだお前？ぶっ殺すぞ！」

と言われ胸ぐらを掴まれる。どうやら顔にでてしまったみたいだ。不良は胸ぐらを掴んだ手とは逆の手を後ろに引き、構える。

「お前みたいな向かってくる勇氣もねえ奴が、睨みつけてくるんじゃないよ。ああ、イラつとした。見逃してやろうと思ったけど、止めだ。ボコボコにしてやるから覚悟しろ」

予想外のことに中学生は愕然とする。体中がガクガク震え、目からは涙もでてきた。嫌だと口で言うことも出来ず、ただ殴られるのを、目を瞑って待っていることしか出来ない。

すると、

ドスンという音とともに、グエツという声が聞こえた。

胸ぐらを掴んでいた手が釈かれ、何事かと目をゆっくりと開けてみる。

ヤンキーの取り巻きの一人が倒れている。その横には今まで居なかった人が頭から血を出しながらピクピクしていた。

なんとなくだが、あの血が出ている人が、上から落ちてきて取り巻きの一人にぶつかったんだろうか。ドスンっていったし。

周りのヤンキーも、何が起きたかわからない。仲間が一人やられたのだが、やった張本人は血を流し、痙攣している。

これ以上はどうしようもない。誰も動けない時間が三十秒程過ぎた頃、ムクツと血まみれの青年が立ち上がる。

見た目二十歳ぐらい。黒のＴシャツに黒のジャージ。靴はサンダルというラフな格好。髪の毛は短髪で黒。身長は百七十ぐらい。太ってはいない。その人は上を向いて

「何すんだ！死んじゃうだろ！すぐく頭が痛いぞ！泣くぞ！」

と叫んだかと思うと突然オイオイと泣き出した。本気で泣いている。未だにヤンキーも固まっていたまま。

泣き止んだ後、周りのヤンキーに、

「おい逃げろ！今からならまだ間に合う！命が惜しいなら早く全速力で汗を流してこい！」

といきなりの強気発言。その言葉で固まったままの彼らは解凍された。

一番ガタイのいい少年が青年（黒）の胸ぐらを掴み、

「なにを寝ぼけたことぬかしとんじゃ！ぶっ殺すぞ！」

と凄むが青年（黒）はガクガク震えながらも

「いいから逃げろって。生きたまま地獄に落ちたくはないだろう？騙されたと思って逃げてくれって」

まったく反省していない。そこでプツンきたヤンキーは拳を振り上げ、顔目掛けて殴りがかった。

それをまともに受け、顔が横を向く。クリーンヒットだった。肉を打つ鈍い音を初めて聞いた中学生は、ガクガクと震えている。

殴られた青年は、鼻血を出しながら殴ったヤンキーを見て、一言。

「もう知らないぞ」

と言って全てを諦めたかのようにダランと体の力を抜いて四肢をなげうつた。なんだこいつ弱いぞとニヤニヤしだしたヤンキー軍団。しかし、そのあとにヤンキー軍団は、瞬時に全滅した。

中学生の少年が見たのは。

青年のように上から降りてきた者が胸ぐらを掴んだ奴と青年を一緒に上から踏みつけ地面に叩き伏せた。それを見て、また固まった

ヤンキーを、近いほうから鳩尾に右ひざを入れてダウン。相手の首と手を取り、足を相手の後ろから足を蹴り上げ、そのまま後頭部から地面に落としてダウン。残り一人の青年は逃げ出したが降りてきた人のほうが速く、捕まった青年はコケてしまい、追いかけた人はその上に乗って後頭部をグーで殴り続けた。

ヤンキーの体の力が抜けたことを確認し、その人は立ち上がって、こっちに向かって歩いてきた。

年齢は十代後半。長くて赤い髪を後ろで縛り、手にはバイクを運転する人がつけるグローブをはめている。服はクリーム色のワンピース。スカートは膝上ぐらい。靴は軍人が履くようないかついもの。顔が見えたときは、ドキツとするくらい綺麗だった。切れ長の目。整った鼻と口。白い肌。

あの人を嫌いだなんて言う人は、多分、ほとんどいないだろうと思えるくらい美人。

その人は中学生のに、落ちていた財布を広いあげながら言った。

「大丈夫？ ケガはない？」

中学生は財布を受けつつ、ウンウンと首を縦に振った。

「この辺りは物騒なところだから、早く家に帰りなさい。」

と美人に言われたら大体の人は言うことを聞く。中学生も御多分に漏れず、顔を赤くし、お礼を言って去って行った。

少女はふうと息を吐き、後ろで寝ている青年（黒）の頭を思いっきり踏みつけた。

何かが削れる音がした。

苦悶の声を上げながらその場で七転八倒する青年。痛みが落ち着いた頃にムクツと起き上がり、涙を溜めた目で少女を指さして言う。

「ちよっ！鼻がもげる！ゴリッていったぞゴリッて！」

泣きべそかいた青年の主張を、少女は冷めた目で言う。

「別にもげたって平気でしょう？達也はそんなことではどうにもならないのだから」

達也^{たつや}と呼ばれた青年は負けじと言う。

「確かにそうだな・・・って！だからといってやりすぎだ！そつちがその気ならこつちにも考えがある！あんたに、人権というものを教えてやる！」

達也は構える。この暴力に屈する訳にはいかないという強い思いを込めて、戦う覚悟だ。

対して少女は構えもせず、ただ立っている。

「やれるものならやってみなさい」

その言葉が引き金となった。達也は少女に組み付こうとする。が、それを少女は体全体を左に向けて躲し、カウンターで達也の顔を殴り飛ばす。

「ブフオ！」

堪らず達也は顔を抑え、俯く。そのスキに少女は、相手の後頭部に向かって踵を落とす。

ゴキンという音を聞いた後、そこには地面に倒れ付した達也がいた。

少女は髪をかきあげながら言う。

「まだまだ訓練が足りないみたいね。どうせなら、今から稽古をつけてさしあげましょうか？」

という声を聞いた瞬間に、達也は土下座ポーズに移行。

「勘弁してください騎李栖様。どうか平和な暮らしをさせてください」

男のプライドなんてものは犬にでも食わせてしまえ、とでも言っているような見事な土下座である。騎李栖きじすと呼ばれた少女も呆れて言う。

「あなたは本当に進歩しないわね。今まで私がなんのために、あなたを連れ回したと思っているの？」

その問いに達也は

「それはあんたの暇つぶしに付き合わされてるだけだ！僕は何も頼んじやいない！どんな恩の着せ方だ！」

「あら、そうなの？てつきり私は、達也もウキウキしながら、付いてきていると思っていたのに・・・」

眉尻を下げて悲しそうな顔をする季李栖。

しかし、達也はこのパターンで一回、ひどい目にあっている。ついさっきの状況がそれだ。

「もうその手には乗らないぞ季李栖。僕だって学習はする」

達也は言う。

「でも、どうしても一緒に来て欲しいなら一つ、条件がある」

季李栖は首をかしげながら言う。

「条件？」

「そうだ」

達也はビシッと指を季李栖のスカートに向ける。

「スカートの中身をスパッツではなくパンツにしろ！そうすれば僕は喜んでお前の側にいびゃ！」

言い切る前に季李栖は、どこかで拾った鉄パイプを、達也の口に押し込んだ。

下男4（後書き）

まだまだ続くよ。

下男5（前書き）

親父登場。

下男5

太陽が繁華街の隙間に落ちだした頃。

目が覚めると達也は路地に転がっていた。

季李栖はいない。どうやらあの後、彼女から殺戮演舞をもらって気絶したらしい。

状況を整理できた達也は起き上がり、体に着いた土を払う。体の調子をチェックし、問題ないことを確認。

「さて、季李栖も帰ったみたいだし、帰るか」

達也はいつものことだと言うみたいに帰路につく。

路地を抜けた先の街は、昼間以上の光量を放っていた。

そこは、中国州の娯楽の中心街。あたりは電飾のオンパレードとBGMの爆音で溢れている。慣れないと足がフラついてしまうほどの賑やかさ。さっきの場所とは大きく違いすぎるため、どこか別の世界にいつてしまったように感じる。

行き交う人の量も、減るところかこれから本番と増えている。

達也はその中を歩き、駅へと向かう。

歩くこと十分。少しひらけた場所に出る。

そこは円の形をした駅前の公園だ。あやりに、滑り台やブランコ、ジャングルジムなど、お決まりの遊具が置いてある。真ん中には小さな噴水があり、絶えず水をまき散らしている。

周りは木で囲まれており、向かって左には時計が建っている。時刻は午後六時半。当たりはまだ明るい、空気の匂いは夜へと移行しだしている。

達也は公園を突っ切り、目の前の駅へと移動する。

駅はこぢんまりとした無人の駅。五段ほどの階段を昇り、すぐ横にある切符の自動販売機で切符を購入。自動改札を抜け、駅の中へ。

時刻表を見てみると、次の電車まで十五分ほどの空き時間。することもなく、達也は近くのベンチに座り一息つく。

小さい屋根より少し前を見上げれば、薄雲から覗く薄青の空がとても綺麗だ。

今日のことを振り返ってみる。散々な一日だった。今年中の不幸が全部来たみたいを感じる。

そもそもこんなことになったのは俺の好奇心が招いた結果だったことを思い出す。

ふじみたつや
藤見達也。大学二年。普段は四国州の大学に通っているため中国州にはいない。だが、大学が夏休みに入ったので久しぶりに実家に帰ってきたのだ。

天気は晴天。遠くに大きな入道雲が見えるが、それ以外は面白みもない空。

達也は電車を降り、懐かしい匂いのする空気を胸いっぱいに吸い込んだ。両手には大きな鞆。服などが入っている。

「はあ。やっぱり住み慣れた土地は落ち着くなあ・・・!?」

達也はギョツとした。

達也の記憶が確かなら、この辺は田園風景が広がっているはず。しかし、達也は見た。

田んぼのど真ん中に、城のようなものが建っている光景を。

遠くからでは大きさはよくわからないが、百メートルぐらいの高さはある。

「おいおい・・・あれ、通報されないのか？」

達也の住んでいる地域は農産生産区域というところ。娯楽に特化したといっても、ここは日本。外国の旅行者の中には日本食を求めてやってくる人もいる。

ほとんどの食料が輸入に頼っている日本。しかし、日本の伝統を廃れさす訳にはいかない。

それを楽しみに来るお客さんも多くいる。

そこで地域一帯を、その専門区域に指定し、伝統を守る場にして
いるのだ。

達也の区域はその中のお米の専門。日本の純粋米を生産することを義務づけられた土地なのだ。ここのお米は基本、寿司や懐石料理に使われている。

もちろん景色も伝統の内、ということとで家の外見は江戸時代のよ
うな平屋の建物が決まりとなっている。

その景色に洋風の城が建っているのは、明らかに違反だ。違反する
ものを作ると取り壊され、また法律違反で罰せられる。

達也は呆れた。

「一体何者なんだろう？あんなの建てたのは。すぐに取り壊されるぞ」

変なものがあるなあ、と思いつつも久しぶりの田舎。早く実家に
帰り、飯でも食わしてもらおうと考え、達也は歩き始める。

見渡す限り田んぼと電柱。間隔を大きく開けて建っている家ばかり。

山間にあるここは緑色の色以外はあまり見えない。

蝉の鳴く声が、唯一中心街に負けない音を発している。

整備されていない土の道を歩く。この町（村？）の人々はみんな
顔見知りだ。

前から歩いてきたおじさんがこちらに手を振っている。

「おう。達也じゃねえか。寂しくなつて帰ってきたのか？」

焼けた肌のやせたじいさん。肩には白いタオルをかけている。典型的な農家のじいさんだ。

達也は答える。

「元気そうだねじいさん。その憎まれ口が懐かしく感じるよ。」

適当に挨拶を済ませ、達也は歩く。

家に着く間に近所の人達のほとんど会った。みんな元気そうだなによりだと達也は思う。

ふと、達也は疑問に思っていたことを口にした。

「あのさあ、あのでかい城はいつ出来たの？僕が一年の時にはなかったはずだけど」

達也は城を指差しながら聞く。すると実家の隣に住むトメばあさんが答えた。

「あれはあそうさなあ・・・あんたが生まれる前にこの土地を納めとった領主が・・・」

何の話をしているんだと言いたいが、トメさんは真面目に言っているの、ばかにできない。ツッコミができない。なので、達也はトメさんの隣のシゲさんに聞く。

「いつから？」

「あれは十五年前からだな」

シゲさんも真剣に答える。

「いやいや！トメさんのボケた頃のことじゃないよ！城の話だよ！」

達也のツツコミを受けて、シゲさんは高らかに笑う。

「冗談だよ。確か・・・先月のあたまだったかな。ここに引っ越して来た若い嬢ちゃんが住むために建てたらしい。」

「城を？」

「城を」

謎だらけだ。とりあえずこの話は置いて、家に行こう。この暑さは堪らない。汗が止まらず、死にそうだ。

「そっか。じゃあそろそろ家に帰るよ。また後で」

おう、と返事を受け、達也は家路を急ぐ。

駅から三十分。平屋の家が見える。そこが達也の家だ。

小さい頃はみんな同じ形の家だったので、よく間違えていたが、この壁に掘った「当たり」の文字が目印になってからはちゃんと帰ることができた。

さすがに今は目印がなくても大丈夫だが。

家が近づくにつれて愕然とする。

「あの城・・・僕んちの真ん前に建ってたのか」

自分の家の目の前に黒を基調とした大きな城があった。

ドラキュラが住んでいそうな佇まいだが、やはり出来たばかり

ということではキレイなものだ。

門は格子戸。その両端の壁の上には監視カメラがある。城は、その高さ五メートルの壁に囲まれていて、上には有刺鉄線が張り巡らされている。そのすぐ内側には木が植えてある。中の様子を見えにくくするためだろう。

なんとか隙間を見つけ、覗くと中の様子は真ん中に丸い大きな花壇があり、向日葵などの色とりどりの花が咲いている。そこまでの道のりは、石で舗装されている。その周りの地面は芝生で覆われている。

道の突き当たりに扉がある。綺麗な彫り物がされた扉。そこに場違いのようにあるインターフォン。

「間違いなくここだけ日本じゃない」

半派呆れる形で達也は、城から離れ向かいの実家へ。

古い引き戸を開けて家に入る。

「ただいまっ」と

中も江戸時代のような造りというわけではなく、一般の家と大して変わらない。

まず正面の玄関を抜けて、左の襖を開けると、そこはテレビが置いてある畳敷きの部屋。右はトイレ。さらに進むとタンスなどが置いてある寝室。テレビの部屋とは襖で繋がっている。

廊下の突き当たりの部屋が台所だ。食事をする机と椅子が置いてあり、キッチンや食器棚、冷蔵庫がある。

流しの横には裏口がり、そこから裏庭に出られる。

達也は荷物を寝室に放り投げ、台所に向かう。冷蔵庫を開け、冷えた麦茶をコップに注ぐ。そのとき

「よう。帰ってたのか」

台所の机の下から達也の父、
時記流じきるが顔を出した。

下男5（後書き）

まだまだ前半です。

下男6（前書き）

屋敷突入！

下男 6

四角いメガネを掛けた細身の男が顔を覗かせている。頼り甲斐のなさそうな印象の男。

実際、小学六年生の従姉弟と腕相撲をして負けている。来ているものは作務衣。この格好で研究者だ。・・・普通、白衣じゃないのか？ 達也は慣れた調子で答える。

「ただいま。また研究所に籠ってたのか父さん。ちゃんと田んぼの世話をしないと、この土地追い出されるぞ」

「いやあ、なぜか今日は研究意欲が収まらなくてな。かれこれ三日は寝ていないよ」

時記流は笑う。

「久しぶりだな達也。どうだ？ 大学は。楽しいか？」

下から這い出しながら聞く。

「うん。まあまあ。バイトが忙しいことを除けば楽しいよ」

仕送りが少ないという嫌味の意味を込めて達也は言う。
それを流して、時記流は椅子に座る。

「ま、ゆっくりしていけ。母さんは今いないが」

「だろうね」

達也は頷く。

達也の母は旅をするのが大好きだ。達也が生まれ、離乳食になった頃、母は

「じゃあ後は頼んだ」

といって旅に出た。あれから一年に数回しか帰ってこない。

達也は麦茶を飲み干し、父に尋ねる。

「ねえ、あの城にはどんな人が住んでるんだ？」

「うん？確か燃えるような色の髪をした女子高校生が住んでいたと思うが。一回挨拶に来たつきりだからな。あまり覚えていない。ただ！」

時記流は力強く言う。

「超がつくほどの美人さんだったぞ！」

「美人！？」

達也も叫ぶ。

今まで恋愛らしい恋愛をしてこなかった達也。興味がなかったのではない。受け入れられたことがないのだ。それは達也の体質が原因なのだが。

達也は鼻を膨らませながら時記流に聞く。

「それでそれで！？」

「うむ。それ以外は記憶にない」

「この役たたず」

吐き捨てるように言う達也。

「なんだよう！それが父に向かって言う言葉かよう！」

「俺も早く彼女の一人や二人は欲しいんだよ！少しは協力してよエ
口親父！」

なんだとこの、と親子ゲンカ開始。
ずいぶんしょうもないが、これがこの家族の日常だ。
もみ合っているうちに、達也は時記流を押し飛ばす。

「家庭内暴力だぞ！お巡りさーん！」

時記流は外に向かって叫ぶ。しかしここは田園地帯。隣近所の間
隔も馬鹿にならないくらい広いのだ。当然交番まで声は届かない。

「一生やってな。僕は挨拶がてら、城に行ってくる」

「どうせ美人の顔が見たいだけだろう」

「ほつといてくれ。僕にもそろそろ春が来てもおかしくないんだ。
それを取りにいくだけさ」

「お前は高望みすぎだ。あんな美人がお前に惚れるわけないだろ
う。私と違って達也はパツとしない顔だからな」

「こんのー・・・人が気にしていることを。だが、ここまできたら、
失うものはなにもない。勝ち取るだけだ」

言うなり立ち上がり、玄関に向かい、靴を履く。

「まあ待て。まださっき、突き飛ばされたお礼をしていないぞ？」

うん？と後ろを振り向くと

筋肉ムキムキの大男が立っていた。

「！！」

それに気づいた達也は、玄関へダッシュ。

しかし遅かった。大男の大木のような腕の一撃を背中にモロにくらい、吹っ飛んだ。

玄関を突き破り家の前の道まで飛ぶ。

「ぐ……は！」

激痛と酸素不足で目眩がする。地面に蹲り、動けない。

なんとか体制を立て直そうとするが、すでに大男が目の前に立っていた。

「おいおい。こんなんでは終わりとはおもしろくねえぞ小僧。おまえ、前より弱くなつてねえか？」

そう言つて達也の頭を掴み、軽々と持ち上げる。

達也の体重は決して重いほうではない。が、一般の青年体重を片手で持ち上げるのは普通、不可能だ。それを楽にやってのける腕力は、想像を超えている。

「は・・・ハイドになるのは反則だぞ糞親父！」

悪態をつくが、相手は気にもしていない。

ハイドと呼ばれた大男は笑う。

「お前が最初に手をだしてきたんだろうが。甘ったれたこといつてんじゃないよ」

掴んだ達也を振りかぶり、地面に叩きつける。

地面が陥没した。達也は体中の骨が折れる音を聞いた。

「ここいらで勘弁してやるか」

ハイドは手を離し、達也を解放する。

「ごほごほ・・・くそ、相変わらず性格が変わりすぎだ」

このハイドと呼ばれている大男は達也の父の時記流だ。

彼は酒を飲むとハイドという大男に変わる。

性格だけでなく、見た目も。

筋骨隆々の焼けた肌にスキンヘッドの頭。目付きは鋭く、歯は全てサメのようにギザギザ。まるでホラー映画に出てくる怪物だ。飢えたライオンでもこいつを襲うことはないだろう。

時記流とハイドは別々の性格をしている。

基本的に時記流は大人しく、ハイドは好戦的だ。ハイドは時記流とはまた別の記憶を持っている。一人の体に二人分の人間が入っているようなものだ。

小さい頃、母がいなるときに親父が酒を間違って飲んで最悪な自体になったことを思い出す。たまたま帰ってきた母が、ハイドを沈めたのだが。今思えばこいつを倒すって・・・。

生まれつきこのような体だった訳ではない。

これは今、時記流が研究しているものに関連している。

気づけばハイドは、時記流へと変わっていた。

時記流は腕を組んで言う。

「暴力反対！」

「あんたに言われたくないわ！」

達也も精一杯の言葉を放つ。

達也は汚れた服を着替えに一旦家に帰り、改めて城に向かう。
時記流は達也に親指を立てて

「グッドラック！」

と見送った。

達也は無視して行く。

玄関を出て、向かいの城へと移動する。

近くで見るとものすごく大きい。白雪姫でも住んでいそうだ。

下は四角く造られ、その真ん中に大きな塔のようなものが建っている。それを囲むように下の四角の角それぞれから、同じ形の真ん中の塔より少し短いものが建っている。

城の前になると、なんとなく入りにくい雰囲気。

時刻は午後二時。まだまだ夏らしい日差しを浴びせているはずなのに、なぜか城の中は暗く感じる。立派な家というのはそれだけで異質なものだ。

例えばいつも安いファミレスに行く人が奮発して高級料理店に入るときの疎外感に似ている。

達也は挨拶するだけと心の中で唱え、なぜか冷や汗をだしながら

格子戸を開ける。

なぜインターフォンを外の格子戸の方へつけなかったのか疑問に思うが、監視カメラ見て納得する。

（なるほど。監視カメラに訪ねて来た人物をちゃんと納めるために、わざわざ中の扉にインターフォンを付けたのか）

監視カメラの存在自体が防犯になっている。泥棒だって見える位置にカメラがあれば近寄らないだろう。だが、それでも中に入ってくる人はちゃんとした用事がある者か、度胸のある泥棒かのどちらかだ。

（まあ監視カメラを潜られたら意味ないけど）

達也は庭に入る。

石畳の道はとても歩きにくい。石と石の間に足が入ればコケそうになる気がして、達也は下を見て歩く。

突然弾丸が足を貫いた。

「え……あ」

その場で膝をつく達也。撃たれたのは右足の太もも。ここを撃たれたら立ち上がることは出来ない。力を入れる度に激痛が走り、立つ気力が削がれる。普通なら。

しかし達也は何事もなかったかのように立ち上がる。血も止まっていた。まるで撃たれていないように見える。

達也は近くの噴水までダッシュした。

撃たれたということは撃つものを持った何かが近くにいるということだ。あそこで止まったままだと確実に息の根を止められる。

噴水に到着する。撃ってきたと思われる方向とは逆の位置に滑り込み、背中を噴水の壁に預ける。噴水の形は円で囲まれた池の真ん中に水を出す細い彫刻が建っているだけなので、大した遮蔽物にはならない。

しかし絶えず水を噴出していることと、少しの壁があるだけで達也の心の安定は変わる。

「くそ！なんなんだ！？なんで撃たれた！？」

混乱する達也。

さっきまで町の住人と談話し、親父とはひと悶着あったが、いつものことなので日常の一貫として収められる。

だが、銃で撃たれることは非日常だ。

達也はこれまでの人生のなかで普段、人が経験しないようなことをいくつも遭って来ている。

実際に銃で撃たれたことは何回かある。しかし、基本その時は逃げていた。

だが、広いようでも逃げるとは狭い城の敷地。最悪なのは出口がないということ。

撃ってきたやつは確実に門を抑えているはずだ。逃げるなら・・・

「裏をかって城に逃げ込む！」

城への入口までの距離は約三十メートル。

達也は心の中でカウントダウンを始める。いくらいんな経験をしたらはいえ、怖いものは怖い。既に足は震え、涙がでてきそうになる。

「9・・・じゅう！」

ダッシュした。

石の道を走る。目は入口だけを見つめる。よそ見はせず、目的地に向かって突き進む。

銃の乱射音が聞こえる。放たれた弾が達也の周りで跳ねた。今は被弾していないが、時間の問題だろう。距離はあと十五メートル。時間にしておよそ四秒。目的地はすぐだ。

だが、この城は甘くなかった。

目の前には地雷原のマークが着いた看板。

「ここにきて何このギャグみたいな看板！てか、玄関に地雷って訪問販売対策にしちゃやりすぎだ！」

意外とツツコミを入れる余裕があるものだな・・・と達也は思う。どうやらこの地雷マークはツボにはまったらしい。

だが止まる訳にはいかない。既に

全身に十数発の弾丸を受けている。

地雷原で止まってしまえば即ミンチだ。お肉屋さんに並ぶことを喜びとしない達也は決意する。

「どうか、飛び越えられるぐらいのものであってくれよ！」

看板手前で達也はジャンプした。飛び出した感じは申し分ない。これなら五、六メートルは行けるだろう。

達也が先の地面に目を向けると

わかりやすく埋まっている地雷の畑が見えた。

地面が盛り上がり、よく見れば歩けば避けられるくらいの幅がある。しかし既に飛んでいる達也にはもう軌道の修正は出来ない。

（クソ！！銃で追い込まれた心理状態を読んで、空中で絶望できるようにしてある。嵌められた！）

入口を目の前にして達也は爆発の光の中に消えた。

向かいの達也の家では、時記流はのんびり麦茶を飲んでいた。研究の意欲は根こそぎ達也に奪われたようで、何をするでもなくボーツとしている。その静けさのなかで

「ん？どこからか軽機関銃の音が聞こえる」

時記流も昔はわんぱくだった。その度が過ぎて、一部の組織に狙われたこともある。そこで聞いた音に似ていたのだ。続いては

「今度は爆発音か？どこかでアクション映画でも撮っているのか？」

茶を飲みながらつぶやく。今まさに息子が大変な目に遭っているのだが、そんなことは露にも思っていない。時記流の頭の中は

（今頃達也は向かいの子とよろしくやってるのかな。くー！羨ましい！母さん！早く帰ってきてくれー！淋しいよー！）

孤独でいっぱいだった。

ここは城の中の一室。電気はついていないが、それを補うほどの無数のモニターが光を放っている。その量は膨大で、六畳ほどの部屋の壁全てがモニターで埋めつくされている。

その真ん中に座る影。長い髪を鬱陶しそうに掻揚げ、ジッと目の前のモニターを見ている。

どうやらモニターは監視カメラの映像を移している。噴水を上か

ら写したもののや、下から城の入口を写したものなど、いろんな角度からの映像が飛び交っている。

その中で今、地雷の爆発で上がった土煙でなにも見えないモニターを見つめている。

（死んだかな）

煙の動き方に変化は見られない。動きがないということは死んでいるのだらう。

（また知り合いの処理業の人に頼むか）

この時代、警察沙汰にならず消える事件は。年間数千件ほど存在する。そこで活躍しているのが処理業の人間だ。

処理業は犯罪などで表沙汰にできないものをきれいに片付けてくれる。死体の処理から証拠の隠滅まで。その働きは多種多様だ。

そんな繋がりがあるということだけでも、この影がどんな世界で生きているのかが伺える。

溜め息を吐き、部屋の入口近くにある固定電話のもとへ行こうと椅子から立ち上がったとき

ピンポン

呼出音がなった

「――」

影はすぐさまモニターへ視線を向ける。玄関先が写っているモニターを覗くと、そこには服がボロボロになってはいるが無傷で立っている達也の姿があった。

下男6（後書き）

ヒロインも登場で次回へ！

下男7（前書き）

秘密が明らかに。

下男7

応答がないのもう一度チャイムを鳴らす。

ピンポン

本当はもう帰リたかつたのだが

（帰るときも地雷や銃撃には会いたくなし、それに、ここまでされたらどんな美人の殺し屋がいるのか確かめないと気が済まない！）

今の達也を動かしているのは少しの怒りと美人に会うという大きな期待だ。

下心MAXである。

服装のことは少し考えたが誰のせいでこうなつたのかを考えると、少しも失礼とは思わない。むしろ、服代を請求してもいいんじゃないか、とまで思えるほど心にくらかの余裕がある。

辛抱強く待っていると、

ギギイ

と大きな彫刻の入つた扉が開いた。

そこから現れたのは

「・・・・・・」

まぎれもない美人だつた。

燃えるような赤い髪のパニーテール。服はクリーム色のワンピース。足は裸足だ。一見細く見える体は出るところは出ていて、とてもスタイルがいい。いや、むしろ胸だけは自己主張が強い。とても顔は切れ長の目と整つた鼻。小さい口。簡単に例えよう。DSな美人の顔だ。

「・・・・・・・・・・」

美人はとても驚いた顔をしている。それはそうだろう。あれだけの戦場をくぐり抜けて無傷なのだ。普通なら、幽霊と見間違える。

ここは最初の言葉が肝心だ、と達也は思う。地獄のような歓迎を受けたが、美人登場で憤りは吹っ飛んだ。それより、今まで女性にはこの体のせいで逃げられたことを考える。心に深い傷を負ったのは一回や二回ではない。ここは相手が考えもつかないことを言うのがいいのではないか、と考え達也は

「俺と結婚してください」

求婚した。すると相手は

「あなた次第ね」

と澄ました顔で言った。

意外な反応に逆に達也が固まった。今までにないパターンだ。まさか可能性を提示されるとは。

「あ・・・いや・・・え・・・本当に？」

「ええ。二、三聞きたいことがあるけど、それによつてはいいわよ」

「結婚っていうのは、男女が一緒になるってことですよ？全てが」

「結婚の意味ぐらい知っているわ」

「・・・」

驚きを通り越して呆れる。いや、自分から求婚しておいてそれはなんだが。改めて彼女の印象を整理する。

強い、と達也は思う。物理的強さではなく、内面の強さだ。言葉に力があり、この自分に一切の恐れを感じていない。普通会ったばかりの相手に、結婚を申し込まれたら即、通報。ましてや自分のようなバケモノみたいな相手なら特に。

（しかもクールだ・・・）

達也はこの子に惚れそうだった。

達也は頬を掻きながら会話する。

「じゃあ・・・質問って言うのは？」

「立ち話もなんだし・・・どうぞ、入って」

達也は城に招かれた。

一体どんな家なんだろう、と達也は想像を膨らます。大体、城に入るなんて初めてだ。なかなか経験できるものではない。この際、じっくり見ていこう。と半ば観光客のような気持ちになっている。わからなくもない。城に住んでいる人と出会うことは普通じゃ考えられない。まして、その住人が美人なら尚更、内装に期待してしまう。そうでしょ？

開けられた大扉をくぐり、達也は中へと入った。そこには

真ん中にちやぶ台が一個だけだった。

「・・・はい？」

達也はドアと部屋の境界で固まった。

えーっと、これはツツコミを期待しているんだろうなと、達也はセオリー通りに考える。よし！

「純和風じゃん！」

ビシッと少女にツツコんだ。少女は

「スーシー、テンプーラ、フジヤマー」

抑揚のない声で答えた。

「あんた、日本をなめてるな？」

案外、ノリがいいのかもしれない。

改めて、周りを見る。

ど真ん中にちやぶ台があり、約六畳ほどの畳が敷いてある。そのほかは、城の中だと思わせる内装だった。

光源はシャンデリア。それも以上に大きい。細かな電球がいくつも付いていて、真ん中に、大きな電球がひとつ。値段は考えたくない。左右とも大きな石の柱が立っている。像などの置物類はない。周りの色は全て白色で統一されていて、外よりも明るく感じる。ちやぶ台の奥には、人が横に四人並んで登れる階段があり、二階には多くの部屋のドアが並んでいる。

他の階段は見当たらない。多分、どこかの部屋から上にあがれるのだろう。

ボーッと突っ立っていると、少女が中に入るように促す。

促されるままに、達也はようやく城の中に入る。三步程進むと少女から待って、と静止を受けた。

「？なんだ？」

問いに答える少女。なにやらリモコンをどこから取り出し、操作しながら、

「話す前に、あなたが危険人物ではないか調べさせてもらっわ」

そう言って少女はリモコンから視線を離す。

達也のすぐ目の前から長方形のゲートが下からせり出てきた。

「あれは・・・もしかして空港とかにある金属探知機か？」

「ええ。あなたが危険物を持っていないかチェックさせてもらっわ」

さあ、と言われ、達也はゲートを潜る。ポーンという音になる。どうやら大丈夫らしい。

「危険物は持っていないわね。なら、合格よ。あの机のところに座っでいて」

（それだけでいいのか・・・。）

ちやぶ台を指さされ、達也は畳敷きの手前で靴を脱ぎ、出入口を背にして座る。

少女はどこかに行ってしまった。飲み物でも出してくれるのだろうか。

「うーん」

達也は考える。城に着いてからというものの、おかしいことが多過

ぎる。まず、庭の防衛設備だ。あれほどの設備は日本にはいない。いくら昔に比べて、犯罪件数が上がったとはいえ、過剰だ。

次に求婚した件。あからさまに俺が悪いのだが、まさか条件付きでオッケーがでるとは。

ここが既におかしい。なぜなら、弾丸の雨と地雷の畑を乗り越えた奴が無傷で立っているのに、その男を家に招くとは常識では考えられない。

そして自分だ。思っていたよりも美人さんなので、撃たれ、爆撃された怒りが一瞬にして吹っ飛んでいる。

あの少女は一体なんなんだ？

（グダグダ考えても仕方ないか。本人に直接聞くのが早いだろう）

そんなことを考えていると、階段から少女が降りてきた。一階には部屋がひとつのないという造り。言ってしまうとてつもなく広い玄関だ。

つまり生活関連の設備は二階にあるということ。二階から少女が降りてくるのはわかるが・・・

（お付きの人とかはいないのか？）

これだけの城だ。一人で維持出来る訳がない。使用人の二人や三人は居てもおかしくない。しかし、少女自らお茶を持ってきたということは、今はいないということだろう。

達也は少女が持ってきたお茶をありがたく受け取る。

少女は達也の向かいに座り、やっと話ができる体制になった。

お茶を啜り、達也が先に質問する。

石の壁などしかないこの空間では質問の声にエコーが混じる。

「あのさ・・・結婚の話は本気なのか？」

一番気になっていたのがこれだ。だって結婚ですよ？いろんな段取りぶっ飛ばしていきなり夫婦になるなんて……。テ・ン・シヨ・ン・み・な・ぎ・っ・て・き・たあああ！

「構わないわ。最初に言っただように、質問に答えてくれた後に考えさせてもらう」

決まった訳ではないが質問の中身によっては俺の人生が決まる。ごくりと唾を飲む。

達也は身構えて言う。

「じゃあ、どうぞ」

少女は髪をかきあげ、

「まずは自己紹介から。私の名は真相騎李栖^{しんそうきりす}。最近ここに引っ越してきたの。年齢は十七。よろしく」

お茶を啜る騎李栖。

「じゃあ次は僕だな。名前は藤見達也。向かいの家に住んでいて、四国州の大学に通っている二年。年齢は二十歳だ」

ここからが本番だ。

「真相さん。あなたの聞きたいことは？」

つたない敬語を使う達也。それを見て騎李栖は、

「敬語は使わなくていいわ。それと苗字よりも名前で呼んでちょうだい。そのほうが気楽でしょう。名前も呼び捨てで構わない」

「おーけー。じゃあ騎李栖。僕の何が聞きたいんだ？」

ある程度の予測はついているが、一応聞いてみる。

「あなたの正体よ。あの銃撃と爆発の中、あなたは無傷で立っていたわ。普通はありえないことよ。どこかの軍人？それとも幽霊？」

もし、本当にこの子に幽霊です、ていったらどうなるんだろう。
・いや、やめておこう。あまりいい想像ができない。

「単刀直入に言おう。僕はフジミだ」

「苗字は知っているわ」

「いやいや！？そうじゃなくて、不死身！死なない体なの！俺は！」

冷静にボケているのか、マジなのがわからない。難しい子だな。
そこもまた、いいんだけど。

「僕の父の一族は代々、不死身なんだ。頭を吹っ飛ばされようが、心臓を撃ち抜かれようが死なない。まあ、例外はあるけどね」

「例外？」

騎李栖は怪訝な顔をする。

「それはまたいつか。しかし、不死身といっても不老ではない。つ

まり年齢的な寿命があるのさ。それ以外では死なない」

騎李栖は目を細める。

「寿命は決まっているのかしら？」

「いいや、それこそ一般の人と同じ。何歳で死ぬかはわからない。
一族の中で一番長生きしても約七十くらいだな」

「なるほど」

そう言っただけ騎李栖はおもむろに達也に何かを投げる。
反射的に受け取った達也は、なんだ？と手の中のモノを見ている。

それは・・・

部屋に爆発音が鳴り響いた。

騎李栖は目の前のちゃぶ台を蹴り上げ、壁にする。

騎李栖が投げたのは手榴弾。爆発してできた破片で相手を切り刻む戦略兵器。

直撃した達也は、その場で横に倒れていた。動きはない。騎李栖がちゃぶ台を除け、達也が視界に入った時、
傷ひとつない達也が座っていた。

「・・・なるほどね。確かに不死身だわ」

どうやら納得してくれたらしい。

「だからと言って！こんな確かめ方はないだろう！」

「なら、ほかの確かめ方がよかったかしら？切ったり、炙ったり、

落としたり。まだまだ方法はあるわよ」

「いいえ！結構です！」

達也は即答する。

そう、と騎李栖は次の質問を出す。

この子超怖い！

ところで、手榴弾は一体どこから出てきたんだ？と騎李栖の服装を見ながら思う。

普通のワンピース。

・・・一体・・・

手榴弾で荒れた畳の上でも、お構いなく続く会話。家族構成や生まれた場所。今は何をしているかなど、まるでお見合いのようだ。

これが最後の質問、と騎李栖は言う。

「達也、あなた戦闘の経験は？」

いきなり物騒だな、と思った。

が、いきなり手榴弾を投げてるような子だ。元々物騒な子なんだ、と情報を切り替える。

「戦闘って言うほどじゃないけど。ケンカぐらいかな」

「ケンカって、どれぐらいの？」

「そりゃあ、路地裏でのケンカだよ。なぜかトラブルに好かれる顔らしくてさ。モテモテで嫌になる」

げんなりした顔で達也は言う。

「そう。銃で撃たれたのも今回が初めてかしら？」

「確か・・・昔に一回だけ撃たれたことがあったな。理由は忘れたけど」

あまり楽しい話題ではない上に、昔の傷まで掘り起こされて、テンションは下降ぎみ。

質問の理由はよくわからないが、いろいろあって疲れたし、そろそろお暇しようかと、達也は立ち上がった。

「そろそろ帰るよ。邪魔したね」

「あら、ゆっくりしていったらいいのに」

不死身の身でも、これ以上ここにいたら、命がいくつあっても足りない気がする。

「実は、さっき実家に帰ってきたばかりだね。自分の家で、ゆっくり休むことにするよ」

じゃあ、と騎李栖は畳の上に紙を広げた。

「これにサインしていつて頂戴。この家のセキュリティに関して、一切口にしないこと。その誓約書よ」

字は英語で書いてあった・・・読めない。

「これ本当にその内容の誓約書？後で金の請求とか来ない？」

「お金なんていらないわよ。ここのセキュリティを突破したのは、

あなただけ。だから情報が漏れたら一大事なの」

防犯意識が強すぎる騎李栖。何かあったのだろうか。

・・・詮索はやめよう。興味本位で聞いてしまつて、大変な目にあつたことは一度や二度ではない。そろそろ学ぶべきだ、と達也は心のなかで頷く。

「わかつた。信じるよ。でも、生憎ハンコは持っていないんだが」

「拇印でいいわよ」

それなら、とサインをして、達也は帰つた。

帰るときはもちろん、セキュリティは切つて貰つた。

達也が帰つた後のホールで騎李栖は呟く。

「銃や爆発物で攻撃されても、彼は怒らない。ほとんどツッコミだつたわね」

騎李栖は二階に上がる階段を昇りながら考える。

「一番大きいのは、不死身の特長ね。・・・使えるわ」

達也が聞いたなら顔が青くなるようなことを声に出す。

ブツブツいいながら、騎李栖は二階のどこかの部屋に入つていった。

下男7（後書き）

さてさて、物語はここから始まる。

下男 8 (前書き)

続き。

下男 8

次の日。

達也は実家で昼食を摂っていた。

今日も相変わらずの暑さ。日差しを直に浴びると肌がじりじりと痛む。

風は吹いているが、ぬるい感触しかない。

そんな日のご飯はソーメンだ。硝子の器に、氷と水を入れ、そこに茹でたソーメンを入れる。つゆに潜らせてすすれば、もう最高！そんな幸福タイムを過ごしていると

玄関のほうから破碎音が聞こえた。

ソーメンを吹き出す達也。何事かと、恐る恐る玄関へと続く廊下を覗き込む。

そこには騎李栖が立っていた。

いつもの赤い髪のパニーテール。今回は黄色のワンピース。靴が軍用靴だったことを除けばパーフェクトだったのだが・・・。

「っていうか、何してくれてんの騎李栖さん！玄関壊すって・・・。また手榴弾か！？」

破壊魔を問いたただす達也。騎李栖はそんな達也に

「ごめんなさい、急いでいるのよ」

どうやら慌てているらしい。

・・・慌てたらドア爆破するのだよ。

ところで、昨日のクールなところが感じられない。何かあったのだ

ろうか。

「どうしたんだ？そんなに慌てて」

玄関のことはひとまず置いておく。理由を尋ねると、

「とりあえず、外に出て」

手を引つ張られる達也。思えばこれが、初めて異性と手を繋いだ瞬間である。

密かに感動している達也を尻目に、騎李栖は自宅の庭へと進む。騎李栖邸の庭。そこには芝生と防風林があるだけの空間だった。普通、花でも植えればいいと思うのだが。まるで、公園である。そんな庭の真ん中に、一人の男が立っていた。その姿、顔、どう見たって・・・

「ヤクザ屋さん？」

オールバックの黒髪、鋭い目付き、がっしりした体格。服は黒のスーツを身にまとっている。

それだけだと、少し恐いだけのサラリーマンのようだが、手に持っているものが異質だった。

ビジネス鞄ではなく、刃物を持っていた。いわゆるドス、というものだ。木目のついた綺麗な鞘に入っている。

達也は何が起きているのか、さっぱりわからない。騎李栖に尋ねる。

「あのお・・・一体なんなんだ？どういう状況だ？」

騎李栖が答える前に、ヤクザが答える。

「それがツレかい？嬢ちゃん」

騎李栖はうなずきながら答える。

「ええ、そうよ」

「なら、話が早え」

ヤクザは達也の目の前まで近づいてきた。

身長は達也より高い。百八十ぐらいだ。上から見下すように達也に言う。

「にいちちゃん。この嬢ちゃんに貸した百万円。払ってもらおうか」

そこで達也はピーンと来る。

騎李栖の方を向き、

「やっぱり保証人の紙だったのかああ！」

泣きながら、騎李栖の肩を掴み、前後に揺らす。

騎李栖は揺れながらも冷静に答える。

「だから、違うわよ。あれは保証人の紙じゃないわ」

何だつて？と動きが止まる。

「じゃあ、あの人はなぜ、俺に借金の返済を求めるんだ？」

「あなたも無関係じゃ無くなったからよ」

「いやいや！無関係ですよ？百万なんて、見たこともないし！」

すると騎李栖が達也の顔に何かの紙を広げて見せた。

それは、昨日達也がサインした用紙。

騎李栖は紙の英語の部分をきれいに剥がしていった。

どうやら英語の部分は下の用紙の上に貼っていたものらしい。

剥がした紙から出てきた文字は・・・

「・・・婚姻届？」

騎李栖は頷く。

「これがどうした・・・てうわぁ！結婚してることになってる俺たち！しかも書いた覚えのないところが俺の字そっくりに書かれている！詐欺だ！これが本当の結婚詐欺だ！」

「オーマイガッ！と達也は頭を抱える。やはり、契約はちゃんと確認しておくことだ。どんな罠があるかわからない。

そんなやりとりを見ていたヤクザも限界に達し、達也の胸ぐらを掴む。

「おい。お前らのいざこざは、俺にはどうでもええんや。はよ金返さんかいボケエ！」

ものすごく恐いと達也は震える。

前回の騎李栖の家でもわかる通り、達也は基本的に臆病だ。

不死身の体をもっているにも、痛いものは痛いし、苦しいものは苦しい。

「そう言われても、そんな大金、家にはないですけど……。おい、騎李栖！こんな大きい家に住んでいるんだから、百万くらいあるだろ！？」

騎李栖は顔を横に振って、

「ない」

ドクシヨー！と吠える達也。

「なら仕方ないなあ。それなら嬢ちゃん。あんたは組の系列の店で働いてもらうで」

ヤクザは達也を投げ捨て、騎李栖の方へ向かう。
顎をクイツと持ち上げ、

「中々の上玉だ。これなら直ぐに借金返せるぞ」

その光景を見た時、達也の心が揺れ動いた。

元はと言えば、騎李栖のせいだから責任とって働いてこい、という気持ち。

昨日今日会った騎李栖だが、いくらなんでもそんなことさせられない、という気持ち。

揺れながらも、元来、優しい達也。覚悟を決めた。

「待て。騎李栖は連れて行かせない」

ああ？とヤクザは達也に向く。

「兄ちゃん。勘違いしたらあかんで。こっちは金を貸しとる身や。」

金も返せん奴の身柄はこつちのもんやで。お前にとやかく言われる筋合いはないわボケ」

「それでも、連れては行かせない。せめて少し待ってもらえませんか？」

足が震える。今から始まるであろう戦いの予感で、既に心が折れそうだ。

「待てるかアホ。生意気いいよると殺すぞガキが」

恐いが、こつちだつて男だ。女の子が困っているのを見過ぐすことはプライドに反する。
。

「殺されても、騎李栖を連れていかせません」

半ばヤケクソ気味にヤクザと相対する達也。

体の震えが相手に分かってしまいそうなほどにパワーアップしている。

空気が変わり、呼吸をするたびに胸が痛い。

ヤクザは動き出した。

「もう、おまえ邪魔や。消えろ」

そう言いながら、達也の顔を殴り飛ばした。

「が・・・あ・・・」

暴力に慣れた者の一撃は重く、達也は立っていられなくなり、その場に屈んだ。

「なんや。よう噛み付いてくると思ったが、クソ弱いやないかい」

屈み混んでいる達也の頭を、ヤクザは踏みつけた。

達也の顔が地面と激突する。

草と土の匂いと、わずかな血の味。どうやら、殴られた時に口を切ったらしい。

達也は悔しさでいっぱいだった。

しかし、思いとは逆に、恐怖のあまり、体に力がはいらない。

ヤクザはその後、何回も頭を踏みつけた。

硬い靴底が頭に当たる音と、ヤクザの笑い声だけが聞こえる。

満足するだけ踏んだヤクザは、騎李栖に視線を向け、話を戻す。

「さて、これで邪魔な奴はおらんだった。行こか、嬢ちゃん」

ヤクザは騎李栖の手をとる。

騎李栖は溜め息を吐いた。こんなものかと思う。

家の嚴重なセキュリティを突破し、地雷を踏んでも無傷な達也が、ヤクザとのケンカでは、なんの役にもたたない。

（期待はずれ・・・だったかしら）

少し、申し訳ない気持ちになったが、まず、このおっさんをどうにかしないといけない。

このままだと本当に働かされそうだ。

「すみません。今思い出したのですが、お金のあてを見つけました。少しここで待っていてもらえますか？」

騎李栖は家にお金を取りに行くことを話す。

しかしヤクザは、

「それは働いて返しな。今更家にあつたと言われても遅いわ。金をここで返してもらうつよりも、嬢ちゃんに働いてもらったほうが儲けれそうやしな」

下卑た笑いをするヤクザ。

やっぱりダメだったか、と騎李栖は納得する。

自宅を見たらわかる通り、騎李栖は大金持ちだ。

騎李栖の父は、いわゆるアラブの石油王と言われるもの。その豊富な財産を駆使して、日本やアメリカなどの優良な会社の株を買いまくり、その会社の殆どが成功している。

世の中の動きを見る目は抜群で、日本の娯楽施設化計画もいち早く参戦し、そこでも膨大な富を得た。

父の国は一夫多妻制で、妻が四人。子供が六人。

そのうちの一人が騎李栖だ。

父が権力者ということもあって、四人の母は、父に媚を売る毎日。父が死んだとき、自分の子供に後を継がせさせてもらったためだ。

媚びる母とドロドロな家族関係。

それに嫌気がさした騎李栖は、父に一人暮らしを提案した。

父は寛大で、すぐに許しが出た。

ちなみに騎李栖の母は日本人。

母の生まれ故郷を一目見るために、騎李栖は日本に渡ってきたのだ。

だから、そもそも百万を借りる理由はない。

この状況は、騎李栖が達也の力を見たいがために用意したのだ。不死身としての戦い方。

決して死ぬことがない者にとっては軽いとさえ思っていた。

だが、現実は違った。

達也はものの数秒でやられた。臆病な性格であつたとしても、も

う少し頑張っただけだった。

夫婦になったのも、借金の責任をうまく達也に負わせることができる考えたからだ。

昨日借り、今日返す約束で。

普通は無理な話したが、あちらさんは、儲けられればいいので、あっさりと承諾した。

わざわざ結婚までしたのに、と騎李栖は残念がる。

「そろそろ行こうか、嬢ちゃん」

ヤクザは騎李栖の手を引いて、車まで歩き出した。なにやら、携帯で電話をしている。

潮時かな、と騎李栖は男の手を振りほどいた。

突然の行動にヤクザは止まる。携帯をしまい、騎李栖に鋭い眼光を向ける。

「なんや嬢ちゃん。ここにきて恐なったんかいな」

あからさまに苛立っている。騎李栖は答える。

「当たり前よ。お金があるのに働かされるなんて、嫌に決まっているわ」

「だがな、実際にまだ金は返してもらってないんや。つまり、嬢ちゃんの所有権は、まだこっちにあるわけや。わしのものをどうしようがかってやるが」

「屁理屈ね。吐き気がするわ」

「おいおい、相手見てケンカ売りな。なんなら、縛っていてもい

いんやで」

「出来るものならどうぞ」

騎李栖は構える。いつでも戦闘が始まってもいいように。

ヤクザは、なめられたもんや、と呟き、騎李栖に向かっていく。

ヤクザは、騎李栖が傷物になっては商売にならないと考え、目立たない胴体を狙いに定めた。

まず仕掛けたのはヤクザ。右の拳を騎李栖の鳩尾目掛けて振るう。対する騎李栖は、相手の行動を予測し、相手の拳を右に流した。力だけなら、騎李栖は男には勝てない。それが暴力に慣れたものならなおさらだ。

相手の力を正面から受け取るのではなく、横にズラすことで、細腕でも相手の攻撃を避けることができる。

騎李栖はその技術を体得していた。

拳を流した行動と蹴りを出す動きは殆ど同時。騎李栖は相手の脇腹につま先を叩き込んだ。

「うっ！」

ヤクザは悶絶する。その隙に、相手の懐に潜り込む。

右手を取り、そのまま一本背負いした。だが、ただの一本背負いなら、相手はすぐさま起き上がってくるだろう。

地面は芝生。アスファルトやコンクリートに叩きつけるならともかく、芝生はそれほどの攻撃力を持っていない。

騎李栖は完全には投げず、頭から垂直に叩きつけた。

ゴキ、とう嫌な音がした。

ヤクザはその場で痙攣。死んではいない。

「ふう・・・こんなものね」

息を吐き、自分の動きに満足する。

ヤクザが気絶していることを確認し、達也を起こしに行く。いつまで寝ているのか、不死身でも気絶するのか、等考えているとき、外から車の止まる音が聞こえた。

「？」

門のほうを見てみると、さっきのヤクザと同じ格好をした人物が三人。

「電話で仲間を呼んでいたのかしら。・・・厄介ね」

騎李栖は考える。

達也の力を測るため、セキュリティのスイッチは切つてある。どうやら向こうも、事の成り行きを把握したらしく、こちらに走って来ている。

「しょうがないわね。・・・どこまでできるかわからないけど、やるだけやってみましょう」

みすみす捕まる訳にはいかない。

逃げることも考えたが、そこで横になつてゐる達也を置いていく訳にはいかない。

こちらが巻き込んだことには責任をとらないと。

気絶しているヤクザの懷からドスを取り、鞘を抜いて構える。相手との距離は約三十メートル。

前かがみになり、走り出そうしたとき、達也が立ち上がった。

下男8（後書き）

達也のターン。

下男9（前書き）

やっと続きます。

下男9

「！」

騎李栖は驚き、動きを止める。

達也は走ってくるヤクザを見ている。

（・・・どうしたのかしら？また恐くて動けなくなっているのか？）

だとしたら、もうこの子に興味はないな、と考える騎李栖。

しかし、騎李栖の思いとは裏腹に、達也はヤクザに向かって走り出した。

「え・・・」

またも驚く。

さつきは一人のヤクザに手も足もでなかった達也が、三人のヤクザに向かっていつている。

達也はまず、先頭にいるヤクザの顔を掴んだ。

掴まれたヤクザはそんなのお構いなしに達也の腹を殴る。

だが、達也は殴られても手を離さない。むしろ、掴まれたヤクザがもがきだした。

「ぐうう・・・」

離せ、と達也の手を引き剥がそうとするが、大の大人が両手を使っても、顔から剥がれない。

達也はそのまま掴んだヤクザを持ち上げ、走ってくる二人に向かって投げ飛ばした。

軽く五メートルほど飛び、二人に激突。
騎李栖は固まっている。

「ありえないわ・・・人一人をあんなにも投げ飛ばすなんて・・・。
普通の筋力ではできないことよ」

ヤクザはその仕事柄、体を鍛えている。体重は軽く七十キロは超えているのだ。それを片手で投げることは普通、無理な話である。

だが、達也はやってのけた。

投げられたヤクザはドスを抜き、達也の腹目掛けて突き刺す。

達也はそれを左手の二の腕と手首の間で受け止める。

血が吹き出る。

目からは涙。それでも、相手の頭に拳を振り落とす。

骨同士のぶつかる音が聞こえた。

ヤクザは鼻血を出して沈んだ。

残り二人。

二人は同時にチャカを抜く。そして直ぐに発砲した。

腕、足、胴体。次々と打ち込まれていく。打たれた場所が弾丸を

食らった反動で跳ねる。

しかし達也は倒れない。

向かって右のヤクザに向かって刺さっていたドスを引き抜き、投げる。

相手はそれを慌てて避ける。

その隙に達也は目の前まで迫り、相手の顔を横から思いっきり殴り飛ばした。

軽く飛び、相手は倒れ込む。

残りひとり恐怖に駆られ、その場から逃走した。

当たり前だ。ドスが刺さり、弾丸を何発受けても平然と立ってい
たら、誰だって逃げる。

車が出る音がして、この戦闘の終わりとなった。

達也は騎李栖の方へ向く。

騎李栖はビクツと体が跳ねる。

達也は騎李栖に近づき、

「大丈夫か？怪我はないか？」

と心配する。

「ええ、大丈夫よ。あなたこそ、あれだけの銃弾を受けて、やっぱり平気なのね」

達也の体から弾が押し出され、地面に落ちていく。

「まあね。死なない体だから」

達也は笑顔だ。

だが、よく見ると体は小刻みに震えている。

騎李栖はそこでホツと安心する。そして、安心した自分がとても恥ずかしかった。

今までどんな困難があっても、恐怖を感じることは少なかった。

しかし、達也の鬼気迫る感じは、予想外なこともあり、とても緊張した。

騎李栖は疑問を達也にぶつける。

「あなた、いきなり人が変わったかのように戦ってたわね。どういうことなの？」

達也は頬を掻きながら、

「ああ・・・」

頭をポリポリ掻く。

「？」

騎李栖は首を傾げる。

「無我夢中ってやつだね」

「・・・なるほど」

（これは思ったより面白いわね。達也をもっと強くすれば、私の目的の為に使えるわね）

算段が終わり、達也に提案する。

「あなた。私と訓練しましょう」

「・・・へ？」

達也は変な声を出す。

「どうやら、あなたは強くなりたいうね。私はあなたを強くすることが出来るわ」

騎李栖は続ける。

「もし、あなたが強くなるなら、この婚約、そのままでもいいわよ」

ぬうわぁにいいいい！！

「そして、あなたが私の理想の強さになれば……この体。好きにしてくれていいわ」

騎李栖は自分の体が良く見えるようにポーズをとる。
達也は

（おいおいなんだこの展開！今まで、青春らしいことなんてなかった。俺の人生のターニングポイントが！いま！目の前にある！）

達也はビシッと体制を直し、

「ご指導よろしくお願い致します！」

おじぎをする。

騎李栖は笑顔で

「わかったわ。頑張つてね。あ・な・た」

こうして地獄のような特訓が始まった。

目的地に着き、電車を降りる。

あれから二週間。

特訓といっても不良達とのケンカや揉め事に首を突っ込んだりと実践趣向の特訓をさせられた。

ケンカ慣れしたおかげか、度胸もついた。

・・・いつになったら騎李栖は認めてくれるのだろうか……。

客観的に自分を見ると、ただのスケベ心でここまでこれたのだから、大したものだと思うし、呆れて物も言えないとも思う。

そんなことを考えているうちに家に着いた。

日はもう、山の方へ沈みかけている。

騎李栖とは、夫婦の関係になっではいるが、どちらもまだ学生。住む場所はそれぞれの家。

僕が認められたら一緒に住めるらしい。

（・・・がんばろう！）

もはや、人生も掛かっている一大プロジェクト！にまで発展したお向かいさん問題。

達也の夏休みは青春真っ盛りだ。

次の日。

空は生憎の曇り空。それでも太陽の頑張りは変わらず、いつもより蒸し暑い。

午前十時。

達也はこの時間に起きる。

あまり寝すぎても時間が勿体ないし、だからといって早く寝るのも勿体ない。

十時あたりが、寝ている時間と起きている時間がちょうどいい具合になる。

ちなみに、父・時記流は、台所にある机の下。

そこに時記流の研究所への入口がある。

基本的に、そこから出てくることはあまりなく、研究所で寝泊りしているのだ。

達也は、台所に行って顔を洗い、トイレと着替えを済ませ、少し遅い朝ごはんを食べようと冷蔵庫を開けた時、

首元に軍用ナイフが突き立てられた。

達也の動きが止まる。

そして理解する。こんなことをしてくる人間は、一人しかいない。

「騎李栖。一体なんの用なんだ？」

ナイフの持ち主は静かに言う。

「寝起き早々で悪いのだけれど、あなた、今朝のニュース見た？」

今朝のニュース？

「起きた時にすぐテレビは付けたけど、面白いモノでもあったの・・・」

言いながらピンと来た達也。

「騎李栖がわざわざ話題に出してくるということは、まさか今日は・・・」

「面白そうな殺人事件が起きたみたいなの。現場もこの四国州のベツドアイランド。近いし、今すぐに行くわよ」

騎李栖は暇が大嫌いだ。毎日僕を痛めつけるのも本人の暇つぶしの為。

結婚も、実際は暇つぶしの一貫だとわかっている。

しかし！たとえ暇つぶしだとしても、結婚したという事実は変わらない。

あの綺麗でスタイルのいい騎李栖が、戸籍上僕のもの！今はそれだけでいい・・・今は。

いずれは全てを手に入れる！それまでは我慢だ、僕！それよりも、

「今すぐ！？っていうか、事件現場は今、警察が調べてるんだろ？行っただって現場を見せてくれるわけじゃないんだから、無理だよ」

達也は無理無理と首を振る。

対して騎李栖は、なんだそんなことか、と話し出す。

「大丈夫よ。現場には夜中に忍び込む予定よ。それまでは周辺で話を聞きに行きましょう」

「いや、夜でも誰かいるでしょ。それにそんなことしたら、公務執行妨害になるんじゃないか・・・」

「それこそ問題ないわ。睡眠ガス入りの缶も準備しているし、泊まる場所も用意している。これだけ準備があつて、何が不満なのかしら」

「だから、事件に首突っ込むのは危な・・・」

文句を言おうとした達也の頭に響く単語があつたことを思い出す。

（泊まる？え、騎李栖と二人つきりで？いやしかし、今までの不良とのケンカとは訳が違う。僕はともかく騎李栖が危ない・・・ことはないか。でも、警察に捕まるのは嫌だなあ。監獄かお泊りか・・・）

愛か法か。

究極の狭間で揺れる達也。

ここで騎李栖がダメ押し。

「今回の事件での出来栄えによつては、達也を認めてもいいわ」

時間が止まった。

達也は今の言葉の意味を頭で考える。つまりは……ゴールイン！？

法を投げ捨て、愛を取る達也。

映画でもよくあることじゃないか。愛がなによりも大事。

「わかった騎李栖。行こう。いざ、事件の究明へ！」

ノリノリで出かけようとする達也の後ろで、騎李栖は、ちよろいわ、と呟いた。

「なんだなんだ？面白そうだな」

机の下の扉から時記流が顔を出した。

「おはようございます、おじさま」

騎李栖は頭を下げる。

「やあ騎李栖ちゃん、おはよう。朝から息子とラブラブだねえ」

ナイフで脅されるのが？と玄関から戻ってきた達也は思っ。

「話は聞かせて貰ったよ。いいものがある」

そいつと時記流はまた研究所に入り、数分後、また出てきた。手には針が止まった銀色の懐中時計。

「これを持っていきなさい。多分、役に立つと思うよ」

達也は受け取り、おや？と時記流に尋ねる。

「父さん、これって・・・」

時記流はニヤリと笑い、

「そうだ。それが必要だと思うぞ」

騎李栖には、なんのことだかわからない。

そんなやりとりの後、達也たちは事件現場へと動き出した。

達也と騎李栖はタクシーを拾い、四国州小豆島の東にある埋立地、四国ベッドアイランド向かう。

タクシーの中で達也は今回の事件について聞いた。

「で、事件って一体なにが起こったんだ？」

騎李栖はええ、と頷き話す。

「ベッドアイランドのマンションの一室で、女性二人の死体を同僚の青年が発見。どうも仕事で聞きたいことがあつたらしく、女性の家を昨日の朝九時に訪ねたみたい。鍵が空いていたので中に入り、呼びかけても返事がない。おかしいと感じた青年は、部屋へと上がり、死体を発見する。」

部屋は荒らされておらず、物取りの犯行ではないらしいわ。ただ・

・・・

騎李栖はここが重要とばかりにタメを作る。

「ただ、血が部屋いっぱいに散っていたことと、窓だけ綺麗なままだったこと。この二つが事件の不気味なところよ。」

警察は顔見知りの犯行か無差別殺人とみて、捜査するらしいの」

達也は後悔した。

殺人事件に関わるんだろ？な、とは思っていたのだが、ここまで異常な事件。さすがに首を突っ込みたくない。

しかし、騎李栖は話を続ける。

「犠牲になった被害者の死体には大きな刃物でめった刺し、切り刻まれていたらしいわ。写真見る？」

そういつて写真を出してくるが、達也は見なかった。

「致命傷になったのは、喉を掻き切られたこと。骨までスッパリだわ。ここまで切れる刃物なんてあるのかしら」

達也は耳を塞いでいた。

「死亡推定時刻は午前零時から一時の間。その時間の防犯カメラにはなにも映っていない。以上が事件のあらましよ」

騎李栖が横の達也を見ると、耳を塞いでいたので、ちょうどいいと写真を見せた。もちろん臉はがちりと動かないよう指で抑えて

「ぎゃああああ！何すんだあ！」

達也は耳から手をどけて目を覆う。

騎李栖は呆れながら話す。

「あなたねえ、これからその犯人を捕まえにいくのよ。それで大丈夫なの？」

「本物の死体の写真なんて見たことないから無理だよ！ていうか、なんでそんなもの持つてるんだ？それに、恐ろしく詳しいじゃないか、事件について」

訝しがる達也に騎李栖は言った。

「警察のデータにハッキングしたの。時間は約一分かかってないわ。気づかれてはいないはずよ」

簡単に言う騎李栖に達也は鳥肌がたつ。

「ハック？そんなことできるのか？」

「私はできないわ。知り合いに頼んで情報を引き抜いてもらったのよ」

「どんな知り合いだよ・・・」

達也は騎李栖に関わったことを、少し後悔する。

「前に言っただけど、私の父は石油王で経営者。もちろん、ハッカーに攻撃されるなんて日常茶飯事。それを防ぐ為、専門の防衛団がいるの」

「それとハッカーの知り合いとどういう関係が？」

騎李栖は話す。

「ハッカーを防ぐにはその手口を知ることが重要。ハッカーを抑えられるのはハッカーだけ。つまり、父はハッカーを育てる機関を作って、それを防衛に当てているの。私の知り合いのハッカーというのは、父から預かった防衛団の一人よ」

騎李栖の父親って一体……。

「それって、既に犯罪に手を染めているのでは？」

「ええ、あなたもこの情報を聞いたのだから同罪ね。たとえ捕まっても、私はお金の力で出てこられるけれど、あなたはどうかしら？ 捕まりたくなかったら、精々頑張って犯人を捕まえることね」

NOOOOO!!

タクシーの中でもお構いなく、達也は悲痛の叫びを上げた。

下男9（後書き）

現場入りへ続く。

下男10（前書き）

続きます。

下男10

達也の家から車で約一時間。

ベッドアイランドと島を繋ぐ、その名も正眠橋。

橋を越えて事件現場近くに到着。

アスファルトやレンガでできた道路は、太陽から降り注ぐ熱を全て反射していて、予想気温よりもかなり暑く感じる。

そんな中、達也と騎李栖は立ち尽くしていた。その理由は、

「おいおい・・・誰一人見えないぞ・・・」

「そうね」

人っ子一人いなかった。

それもそのはず。このベッドアイランドは基本的に社会人を中心に貸し出されている。

世間では夏休みだと騒いでも、社会人にとっては関係ない。皆、仕事に出かけているので外に人の気配は皆無。

「これじゃあ、情報収集もままならないな。おまけに、とても暑い」

「やっぱり不死身でも暑いのは辛いよね」

騎李栖は涼しい顔で言う。

「あんたは今まで僕の何を見てきたんだ？毎日暑がってたはずだけど」

「あら、そうだったかしら」

「というか、逆に君に聞きたいんだけど」

「何？」

達也は勢い良く、騎李栖を指し、

「なぜ、汗をかいていない!？」

騎李栖はタクシーから出てから、汗ひとつかいていない。騎李栖の方こそ人間か？

「だって、私はもつと暑い国の出身なのよ？このくらいの暑さは慣れっこだわ」

「それでも汗くらいは出ると思うけど・・・」

こんな問答をしに、ここにきたわけじゃない。
ただでさえとても暑い中、人を探して話を聞きに行くのだから。
一刻も早く、やることをやってしまおう。

「とりあえず歩こうか。誰かに出くわすかもしれないし」

達也の提案で、二人は歩き出した。

周りはマンションだらけ。

聞いてはいたが、本当に面白みのない島だ。

本島は、娯楽で溢れかえっているというのに。

まさに、真逆の世界だ。

そう感じると、娯楽で埋めつくされた所も悪くない。

若干一名は、それさえも暇だというのだが。

歩くこと二十分。事件現場のマンションに到着。

問題の階は、テレビでよく見るビニールシートやテープで囲まれている。

そこにはまだ、事件解決のために頑張っている方々が見える。道路には四台のパトカーに一題のワゴン車。

「やっぱり、まだ調べているわね」

「当たり前だ。昨日の今日だぞ」

まだ乗り込むことは困難だと分かり、仕方なく情報収集に戻る。だが、ここからはとても楽に、情報を集めることが出来た。

情報源は、事件現場の野次馬。

まだ、事件の熱がおさまらない人たちは結構いるらしく、マンション入口に三十人ほどの人集りが出来ている。

これはラッキーと、達也と騎李栖は情報を集める。

こちらにも、野次馬のように見せ、一人一人、話しかける。五人程調べた頃、達也は妙な話を聞いた。

「怪談話？」

達也は首を傾げる。

そうなのよ、とおばさんは話す。

「最近ねえ、変な話がこの島で流行ってんのよ。なんでも、今回の事件の状況と似ているとか」

小太りのおばさんは頬に手をあて、話す。

「こんな話なの・・・」

ある大学生のAさんは、終電を過ぎてしまい帰れなくなったBさんを、家に招待しました。Aさんの家は景色がとて面白いと評判なマンションに住んでいたので、Bさんは楽しみにしながら家に向かいました。

家についたBさんは早速ベッドの反対側にある大きなベランダの窓から外を眺めました。

するとBさんは

「今からコンビニ行こう」といいだしました。

Aさんは

「えええ！帰ってきたばかりだよ！？飲み物も食べ物も冷蔵庫の中に入ってるから、別に買わなくても大丈夫だよ」

と言ったのですが、BさんはしつこくAさんを誘いました。

Aさんは根負けし、ぶつぶつ言いながらも付き合いました。

玄関まで着き、自動ドアをくぐり、さあ行くかと移動し始めました。ですがBさんはコンビニがある方角と反対の方向に歩き始めました。Aさんはそっぢじゃないよ、と言ったのですが、Bさんはいや、こっちといって黙々と歩き始めました。

さすがのAさんもなにかおかしいと感じ、Bさんに訪ねました。

「どうしたの！？一体なんなの！？」

するとBさんは、

「ここまでくれば大丈夫かな」

と言い、Aさんの質問に答えました。

「実は私が窓を見ると、窓にベッドが写っていて、そのベッドの下に・・・鎌を持った男が隠れていたの。あそこで言うとか殺されると思ったから、外に出て知らせようと思って。今向かっているのは交番なの」

おばさんは、やっと言いたかったことが言えた、といった感じでスツキリした顔をしている。

対するこっちはテンションダダ下がりである。
その様子もおばさんのテンションを上げさせる。

「あら、ちょっと恐かった？男の子なんだから、これくらいは平気よね？」

おほほ、と帰っていったおばさん。

ただの噂とはいえ、あまりに不吉な話した。
気を取り直して、情報収集を再開する。

三十人全ての人からの情報収集は終わった。
全部終わるのに三時間。この炎天下のなかを三時間・・・頭痛い。

騎李栖の方も、なにやら顔がしかめっ面している。さすがの騎李栖も暑かったのだろうか。

達也は騎李栖へと報告をしに行く。

「おーい、こっちは終わったぞ」

騎李栖はこちらに気づき、

「ええ、こっちも終わったわ」

と返す。

お互いの情報を交換する。
すると、

「おいおい、三十人全員がこの噂を聞いたことがあるのか」

「そうみたいね。犯人の形はめちやくちゃだったけれど。男や女。人や人外。精神病患者や、快楽殺人犯。ただ、ひとつだけはっきりしているのは・・・」

「みんなが、この話が事件に関係していると思っている。ということか」

そうなのだ。三十人全員が同じ話を聞いたことがあると言い、また、その話が事件に関係していると誰もが同じ疑問を持っていたのだ。

「そういえば」

騎李栖は言う。

「この話しは都市伝説に似ているって言ってた人がいたわ」

そこで達也はなるほど、と手を打つ。

「どこかで聞いたことがあると思ったら、そうか……都市伝説だ」

「？」

騎李栖は首を傾げる。

「都市伝説っていうのはなんなの？」

「ええつとね、これは……」

「待って」

聞いた騎李栖が止める。

「少し、涼しい場所に行きましょう。こんな街でも、喫茶店のひとつぐらいはあるはずよ」

賛成！と達也は返事をする。

事件の重要な情報を手に入れた興奮の裏で、首を突っ込んではいけないところに首を突っ込んだのではないかと達也は少し後悔した。

午後一時。

事件現場から徒歩十分のところにある、喫茶店「ルベリエ」

内装は、どこかシックな造りになっており、とても落ち着く。

小さな音で、風に靡く木々の音が聞こえる。これが店内のBGMらしい。

達也たちは、ここで先程聞取りをした情報を交換する。

「やっぱり際立って見えるのは噂話だな」

達也は、注文したアイスコーヒーを飲みながらメモ帳をめくる。

「そうね。これが事件と関係しているとは思えないけれど」

騎李栖は、注文したストロベリーパフェをちまちま食べている。

「しかし、騎李栖がパフェを食べるとは思わなかった」

「どういうこと？」

「なんだか・・・イメージと違う感じがして」

騎李栖はムツとした顔をする。

「失礼ね。私だって普通の高校生よ。年頃に合った、食べたいものくらいはあるわよ」

それはそうなんだけど・・・と達也は苦笑い。

今までこの少女にドえらい目にあわされたからか、あまり年下のイメージがない。

また、住んでいる家や、重火器の取り扱いに長けていることから、まるで女子高生のイメージが湧かない。

パフェを食べている騎李栖は、なんだか不思議な感じだった。さて、と達也は話を戻す。

「何個か、同じ情報があるね。これを抜き出していこうか」

達也はメモ帳に単語を書いていく。

「噂、事件と酷似。そのほかもチヨロチヨロあるけど、際立っているのはこの二つだな」

「そうね。端的にみて、やっぱり噂がダントツね」

娯楽の国、日本。娯楽になるものならなんでも来い、という風潮がある。

その中にももちろん、噂話も存在する。恐い話しやご近所での噂話など様々だが、その伝達スピードは尋常ではなく、ある一定の噂話は法律で禁止されているものもある。

騎李栖はいつものそれだと思っているが、達也は少し違うらしい。騎李栖は訪ねる。

「達也。あなた、この噂話がとても気になっているみたいね」

達也は頷く。

「うん。そうなんだよ。ちょっと引つかかることがあってね」

騎李栖はパフェを食べ終わり、スプーンを置く。

「ところで、さっき言っていた都市伝説って言うのはなんなの？」

達也は驚いた顔をする。

「え！？知らないの！？」

「ええ、噂話に興味がなかったから」

じゃあ、と達也は説明する。

「都市伝説っていうのはこれで一つのジャンルなんだ。怖い話や企業の話し、物の話しなど、種類はたくさんある。

今回の話しは、怖い方の分類だね」

「いろんな話があるのね」

「そう。その中には、ありえないものが多いけど、極稀に、本物が混ざっていることがある。

今回の話しは【下男】という話しだ」

「どんな話なの？聴き取りの時には、私のところは誰も詳しくは知らなかったみたいだから、聞けなかったの」

それはね、と達也はさっきおばさんに聞いた話をする。

騎李栖の反応は・・・

「ありえなくもないわね」

意外と否定はしなかった。

「でしょ？だからあそこで集まってた人は、ニュースで見たとき、この話と酷似しているとわかったから気にしてるんだよ」

それに、と続ける。

「今回の話しが派生したものはいくつもある。部屋の中で死んで終

わってしまつものもね」

「だからといって、これが事件に関係あるかどうかはわからないわ」

「だよねー」

「そもそも、犯人の手掛かりも何も聞き取れていない。私からすれば実りのない時間だったわ」

騎李栖は少し、苛立っている。

暑さのせいだと思いたい。

達也はでもさ、と続ける。

「さつきもビックリしたけど、この噂、あそこの集まりだけじゃなく、この島全体に広がってるっていうのは少し変じゃないか？」

「どうして？」

騎李栖はハテナを作る。

「いくら娯楽に飢えていると言っても、この話だけしか広まっていないのなら、都市伝説が広まったんじゃないかって、この話だけが広まったことになる」

確かに、と騎李栖。

「それじゃあ、意図的にその話だけを広めたっていうの？それこそなんの為に？」

「理由はわからないけどさ、何かしら関係はあると思うんだよね」

うーんと達也は唸る。

そこで騎李栖が

「考えても仕方がないわよ。とりあえず、夜を待って現場に行きましよう。話しはそれからだわ」

と言って、分析は終了。

夜を待つことになった。

下男10（後書き）

まだまだまだ続きます。

下男11（前書き）

続きます。

下男11

深夜二時。

ベッドアイランドの夜は早い。

島から見える本島は、まだまだ昼間並みの輝きを放っている。対するこちらは殆どが消灯し、眠りにについている。

そんな暗闇を達也と騎李栖が歩く。

たどり着いた事件現場には、誰一人としていない。

達也は呆れて言う。

「なんだあ？誰もいないぞ。サボってんのかな？」

「周りを見なさい。ほとんどの窓に明かりがついていない。みんな寝ているのよ」

だから？と達也は聞く。

「つまり、みんな寝ているから、ここに来る人もいないってことよ。よっぽど仕事好きの人の集まりらしいわねここは」

そんな話をしながら、騎李栖はドアを開ける。

ポコンっという独特の音がして開いた。

「鍵かけないんだ」

「普通は好き好んでは来ないわよ」

いると思うけどなあ、と言っている達也を無視して、騎李栖は中に入る。

空気が変わった。

どんよりと淀んだ空間。

とてつもない異臭。

別に怖くはないのだが、体がこの先に行くことを拒否しているかのように重い。

それでも騎李栖は進む。

廊下はなにも荒れてはいない。

ところどころで警察の仕事が垣間見える。

いろんなメモ書きや、なにかの粉の残りカス。リビングには死体の形に線を引いている。

ドラマの刑事モノとよく似ていた。

騎李栖がリビングに入ると

「やっぱりここが犯行現場らしいわね」

そうとわかる絶対的なモノ。

騎李栖が見ている光景は

真っ赤な血の海。

夏場の夜。

血は腐って生臭い匂いを発している。

異臭の原因はこれだ。

鼻が曲がる。

口で呼吸しても、この匂いが体に入ってくると思っただけで、気持ちが悪いくらい。

息をしたくないが、そういうわけにもいかない。

我慢して、騎李栖は死体があつた場所を見る。

死体の形からして、どうやら被害者二人は、寄り添うように座っていたらしい。

片方の頭がもう一つの死体の肩に乗っけるような形をとっている。次に血の行き先を見してみる。

床、天井、壁と飛び散っているのに、

「なぜこの窓だけキレイなのかしら」

よく見てみると、窓ガラスには指紋ひとつ付いていない。
キレイすぎていた。

普通に生活していたら付くはずの指紋がない。
まるで鏡のようだ。

「犯人が吹いていったのかしら……。だとしても、なぜ……」

騎李栖は他を調べたが、特になんの成果もなかった。
台所や風呂、トイレも見したが特に変なところはない。

さすがに警察も馬鹿ではないか、と騎李栖は半ば、証拠漁りをや
めようと思っていたとき、

「やっぱりな……」

と呟いた達也の声を聞いた。

達也がいたのはリビング。

騎李栖は達也の方を見ると、達也は家を出るときに、父からもら
った銀の懐中時計を見ていた。

（確かあれは壊れていたはずよね。……なのになぜ、ここで時計
を見ているのかしら？）

好奇心で達也の時計を覗いてみると、

壊れていたはずの懐中時計の針がぐるぐる回っていた。

「これって・・・どういうこと？」

壊れて動かないはずの懐中時計。

それが今、まるで早送りしているように針が動いている。

壊れている物が動き出している、ということだけで、この部屋の異常さを知るには十分だ。

この懐中時計はなんなのか？なぜ、この事件現場で動き出したのか？

場の雰囲気も相まって、とても不気味だ。

疑問を達也にぶつける。

「これはね。ある物質の濃度を測るものなんだ」

突然の話に騎李栖は頭が回らない。

「物質？」

「そう物質。空气中に漂っているそれは、ここでは普通の濃度の数値を軽くオーバーしているみたい」

「どうということなの？」

「これが事件の真相なんだよ、騎李栖」

訳がわからない。一体達也は何を言っているのか・・・。

「とりあえず、ここから出ましょう。あなたとの話は、用意した部屋でじっくり聞いてあげるわ」

移動を促す騎李栖。

「わかったよ、行こういややあああああ！！ちよつちよと
なんで人の背中にコンバットナイフなんか刺してんの！？痛い痛い
痛い！！そして血が！血が！床に落ちちゃう！落たら大変なこと
になる！僕が疑われちゃううう」

騎李栖のシャレになっていない攻撃を受けながら、達也たちは事
件現場を後にした。

「いやあ・・・確かに便利っていえば便利なんだけどさ」
深夜三時。

達也は騎李栖が用意した一室にいる。問題なのは、
間取りが全て、事件現場と同じということ。
不気味このうえない。

「私が無意味な部屋を取るわけないでしょ？どうせなら検証も出来
るほうがいいじゃない」

ここは事件があつたマンション。そのひとつ下の階の十階の角部
屋。

つまり、事件が起きた部屋の真下になる。

どうも上の階であんな悲惨な事件が起きたせいで、このマンショ
ンから立ち退いた人が多くいるらしく、今いるこの部屋もその一つ
である。

部屋の中には布団が二つ。ポットや冷蔵庫、電子レンジなど、生
活に必要なものは全部揃っている。さすがお金持ちだな、と達也は
関心する。

死体があつたところと同じ形のリビングで、騎李栖はお茶を一口
飲み、話を切り出す。

「さあ、話してもらおうよ。懐中時計の示す意味と、事件の真相と
いうのを」

騎李栖はイライラしている。

騎李栖は、幼い頃から色んな教育を受けてきた。

それは一般的な知識からそうではない知識。格闘術や兵法までも
騎李栖は吸収してきた。

今となっても学ぶことはやめず、取り入れるものは全てこの体に
入れてきた。それなのに・・・

自分は何もわからなかった。あの現場は、ただの殺人事件の起き
た場所というだけ。さして、他の意味は取れなかった。

それなのに、達也は他の意味を見つけたらしい。それがあの懐中
時計が関係しているなら、それを知りたい。

知識的欲求とプライドがせめぎ合い、精神が落ち着かない。

達也も一口お茶を飲み、質問に答えた。

「先に言うと、あれは人が起こした事件じゃない」

きっぱりと言った。

「?どういうこと?」

「つまり、人じゃないんだ犯人は」

余計にわからない。

「なにそれ・・・犯人はお化けとでも言うのかしら?」

騎李栖は溜め息を付く。

さっきまで真剣に落ち込んでいた自分が恥ずかしくなる。

（犯人がひとじゃないって・・・馬鹿じゃないの）

しかし達也は真剣な顔で続ける。

「それに近いものがあるね。騎李栖なら知ってるんじゃないかな、
MII^{ミイ}のことを」

「・・・」

聞いたことがある。

父が主催するコンペ。父が援助を出すのに足る会社かどうかを競う大会で、学会方面からMIIのことを発表しているところがあった。確か・・・

「理想を現実に変える物質だったかしら」

そう、と達也は頷く。

「あの発表が実質、初めて世間にMIIを公表したことになる。でも、そんな物質が存在するわけがない、と一蹴されて終わったけど」

あの時の父は、興味を持っていたが、他の者たちの大反発によって、資金援助ができなかったんだっけ、と騎李栖は思い出す。

「お金がなくなって、研究者はどんどんやめていった。僕の父さんもその一人だったけど、どこからか調達したお金で、また研究を始めている」

達也は、ポケットから懐中時計を取り出し、

「これがその研究の成果のひとつだ」

懐中時計を開く。すると、

「針が・・・動いている・・・」

騎李栖は時計をよく見る。どう見てもただの懐中時計にしか見えない。

「針が動いているだろ？これは時間を示しているんじゃない。M Iの濃度を示しているんだ」

「・・・でも、これだけじゃM I Iが存在する証明にはならないわ」

針が動いているだけでは、信じることは出来ない。出来るわけがない。

ただの壊れた懐中時計かもしれないし、玩具かもしれない。騎李栖は疑う。

「まあ、話を最後まで聞いてくれ。とりあえず、M I Iが存在すると仮定して、これは針の速度でその濃度を分ける。数値化はさすがにまだ無理らしいからね」

達也は続ける。

「そしてあの現場では、針が物凄く早く動いていた。これは、あそこでM I Iの濃度が濃かったことを示す。つまり、反応したんだ」

「反応・・・？」

「そう。M I Iは人の思いや願い。つまりは心に反応するんだ。世界中で奇跡と呼ばれたり、最悪の事件が起こったら、その全てにこの物質が働いたと思っていい」

大きな話になってきたと騎李栖は少し、身構える。

「今までの事例の中で、この物質が反応したことが多い心境は、恐怖だ」

「恐怖？それは感情であって、思いではないでしょ？」

「そう。でも、感情と思いが合致したとき、M I Iはとてつもない反応をみせる。その合致が多かったのが恐怖なんだ」

騎李栖は待つて、と達也を止める。

「M I Iの話はもういいわ。問題なのは、それがこの事件とどう関係しているかよ」

そうだった、と達也は謝る。

「ごめん。話を元に戻そう。この島では、噂が広まっていたよね」

騎李栖は頷く。

「ええ。都市伝説だったかしら」

「そう。この都市伝説の面白いところは、中には本物が混ざっていることがあるということ。あまりに残虐な事件はニュースにはならな

い。それが何処からか漏れて、噂となって世間に流れる」

達也はどんどんノツてくる。

「それを野次馬の人たちは全員知っていた。この島全体に広まっているしね」

そろそろ四時。まだ日は昇ってこないが、仕事好きのここの住民は、起きだす頃だろう。

眠気のせいかな、達也はテンションが高くなっている。

「MIIの反応条件は、その思いの強さによる。

思いが強ければ強い程、反応しやすいんだ。それが思いの量によるものか、質によるものに分かれるけどね」

「それじゃ、一人の人間が、お金持ちになりたいと強く願えば叶うってこと？」

そんな夢のような物質が本当に存在するのなら、世界は混沌としているはず。

「もちろん。その願いが強ければ。でも、生半可な強さではダメだ。涙が枯れるほどの思いがないと反応しない」

「今回の事件はどうなの？そこまでの願いや思いではないと思うけれど・・・」

いくらここの島の全員がその噂を知っているとしても、そこまでのものなのか。

疑問を口にする騎李栖。

「確かに。だから、僕はこう考える。誰かが噂を流した。それに尾ひれを付けて。多分、さくらか何人かいるんだろう」

冷めてしまったお茶を飲む達也。

騎李栖の疑問は今だ晴れない。むしろ多くなる一方だ。

「つまりこういうことかしら。この島で、誰かが噂を流した。それは今回のような事件を起こす為。噂を流した人物は人の心に恐怖を植え付けることで、MIIを反応させるのに足るモノに変えた」

でも一体なんの為に？

「それはわからない。けど、僕が話を聞いたお婆さんの反応からして、そんなに恐がってなかったけどね」

今度は達也が疑問に思う。

「私の方もそうだったわ。でも、もしその話が本当だとしたら・・・結果として事件は起きた。これからは、この事件のせいで余計に噂の恐怖が信憑性を持った」

うん、と達也は頷く。

「多分・・・まだまだ事件は続くと思う。警察ではどうしようもない事件が」

騎李栖はまだ、MIIの話を信じていない。自分の目で確かめるまでは。

そこで騎李栖はふと、思う。

「達也。あなたはなぜ、そこまでM I Iのことを信じているの？いつものあなたなら、信じないでしょ」

いくら自分の父親がその研究をしているとしても。

達也は暗い顔になる。

眉が寄り、目は下を向く。

「昔、ちよつとね・・・」

なにかあったのか、と聞きたい騎李栖だが、相手のトラウマを話題にするほど、騎李栖はひどい女ではない。その話しはここまでにした。

なら、もうひとつの理由を尋ねる。

「ところで、なんでM I Iって名前なの？何かの頭文字を合わせたの？」

達也は少し恥ずかしそうに言った。

「うちの父さんが名付けたんだ。理由は、僕の母親。当時はまだ付き合ってもなかったらしいけど、その時に母親にその名前を呼んでほしかったんだってさ」

「？」

意味がわからない。

「M I Iってさ、猫の鳴き声に似てるだろ？それを母親に発音させて、喜んでたんだってさ。そうそう。騎李栖も、結構可愛かったよ

「ぼあ！」

達也が言い終わる前に、口にピンを抜いた手榴弾を口に突っ込んだ。

爆発し、達也の頭は吹っ飛んだ。

その横で、騎李栖は少し、顔を紅くして、

「可愛い・・・」

まんざらでもなさそうだった。

下男11（後書き）

さあてどうなっていくか。

下男12（前書き）

お久しぶりです。仕事の都合、こんな時期まで何もできませんでした。見ていてくださった方に深く、お詫びします。
ということで、今回はお風呂シーンです。

下男12

午前五時。

空は青くなってきた。それを見ると、寝不足で体が重くなっている。どうやら、結構な疲労が溜まっているらしい。

騎李栖は立ち上がり一言。

「お風呂に行くわ」

そういつて風呂場に向かう。

この部屋には脱衣所がない。つまり、

（覗き放題だぞ達也！）

お気づきの通り、彼女はとても綺麗だ。そして体付きも、超高校生級である。

先程爆破された達也はムクッと起き上がり、騎李栖が消えていった方向を凝視する。

「今行ったら確実に消される。しかし、俺は不死身。何をされても死にはしない。だが・・・」

爆発の衝撃で、もう一つの人格が顔を出している達也。こちらの方は、やや好戦的でエロい。

「あいつは俺が復活するまでの時間を熟知している・・・。ここは・・・やはり風呂に入った瞬間を狙っていくことにするか」

そうと決まれば、達也は立ち上がり、風呂場まで足音を立てずに

移動する。

こんな機会は滅多にない。

戸籍上夫婦な騎李栖と達也。

だが、今まで何も夫婦らしいことなどしてはいない。

今回の事件に関わったのも、全ては騎李栖に自分を夫として認めさせる為。

達也がいることを承知で、騎李栖は風呂に入っている。これは・

「無言のカモン!？」

好戦的な人格は、少し馬鹿らしい。

静かに風呂前に到着。

下には騎李栖の服が落ちている。本当ならこれも堪能したいのだが・・・

「これは罠だ」

多分、触ると手や足を喰いちぎる何かが出てくるはず。

冷や汗を流しながら達也は笑をみせる。

「俺を甘く見るなよ騎李栖。俺の目的はあくまでお前の裸だ。それ以外は目もくれないぜ」

風呂場からは、水の流れる音が聞こえる。ドアの磨りガラスに写っているシルエットは、それだけで効果抜群だ。

(ありがとう。神よ!)

神がいるであろう場所に向かってお礼を言う。

さて、ここからが本番だ。

騎李栖のことだ。必ずドアにも何かしらの仕掛けをしているはず。その他にも、トラップは目白押しのはずだ。

息をするようにトラップを仕掛けることが出来るミリタリー少女騎李栖。ならば・・・

「ここからは突貫じゃあああああ！！」

意を決して突撃する達也。

まずは敷いてあるマット。

乗った瞬間に下から針が飛び出す。

足を貫かれた達也はそこに縫い止められる。

「ぐお・・・ちょこざいな！」

次にドアノブ。人を丸コゲに出来るほどの電流が達也を襲う。だが、達也は屈しない。ここまでは、まだ想像の範囲内だ。

「ここからが本番だあ！！」

黒コゲになりながら、達也はドアノブを回す。

そこには・・・

「・・・え？」

仁王立ちで待っている騎李栖だった。

何も纏わず、隠しもせず、ただただ、達也を見ている。

（なにこれなにこれなにこれ！？想定外すぎるぞこれは！？）

達也も固まる。しかし、目だけは忙しく動き回る。

白く、綺麗な肌・・・ではなかった。驚くほどの傷の痕。

体付きは普通の子よりも優れているのに、この傷がそれに影をうつっている。

胸から下にかけて、切られたような傷。脇腹やヘソの下にも。背中は見えないが、傷があるのだろうことは想像がつく。その衝撃をもって、達也は言葉を放つ。

「これは・・・遂に俺のものになる気になったっていうことどうヴおあー!!」

顔にフルオート射撃。

「女性でも楽に使える」がキャッチコピーのレディースマシンガンが達也をひき肉にする。

達也が動かなくなっただとところで撃つのをやめる。

扉を閉める前に騎李栖は一言、

「・・・ありがとう」

せつかくのお礼も、達也には聞こえていなかった。

午後一時。

達也はあまりの暑さと痛さに目が覚める。

(いって・・・ここは?)

達也が寝ていたのは風呂場の前。騎李栖に滅多打ちにされた場所でそのまま眠ってしまったらしい。

「ひどいことしてくれたよな・・・しかし・・・」

傷。

騎李栖がどんな生活を送ってきたのかは知らない。

しかし、お金持ちであること、厳重なセキュリティを設置していたこと。

そこから大体の検討がつく。

（まあ、別にいいか）

わざわざ心の傷を開かせることはしなくていい。

問題なのは、これからの接し方だ。

目的とは別のものまで見てしまった。だが、裸を見たことも相まって、今回のオシオキがこれで済むはずがない。

さらにランクが上の地獄が待っているはずだ。

「くっ……僕は男だ。甘んじてバツを受けよう」

覚悟を決め、達也はリビングに戻る。そこには、テレビを見ている騎李栖がいた。

第一声。

ここが重要。

ありきたりな感じがいいと思い、達也は喋る。

「おはよう、騎李栖」

対する騎李栖は、

「事件よ」

いつもの冷めたイントネーションで返す。

よかった！怒ってないみたいだ！

ん……事件？

「事件っていうのは・・・俺のことか!？」

やばい!怒ってた!!

何言っているのよ・・・と騎李栖は呆れた顔で言い、

「また、同じ事件が起きたみたいよ。今度の被害者は男。部屋の間取りと殺され方は似ているわ」

達也もテレビを見る。

この島で、またもや猟奇殺人。M I Iの存在を知っている者としては、早く解決したい。

騎李栖を真正銘自分の奥さんにするために!!

「よし、今度はこの場所に行ってみよう」

ええ、と返す騎李栖。

早速、懐中時計手にとった時、

「!」

針がありえないスピードで回っていた。

物音がしないので騎李栖は達也を見やり、

「どうしたの？」

達也は騎李栖に時計を見せる。

「・・・これは」

驚く騎李栖。

この反応の仕方は、先日の事件現場の時よりも大きい。

「うん。どうやら、今度はこのマンションで起こるらしい」

「最初の事件もここだったのに？」

「MIIは世界中に存在するんだ。同じところで起きたって不思議じゃない」

達也は出かける準備をする。

「とりあえず、このマンションを調べよう。話の関係から、見晴らしのいい場所を重点的にね」

「わかったわ」

かくして、事件捜査二日目の開始。

下男12（後書き）

これからは一週間に最低一話、載せていきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3450w/>

真・都市伝説の不死身さん

2011年11月4日02時02分発行